

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
平成三十年五月一日発行（毎月一回一日発行）
第十七卷 第二号（通卷一九四号）

万象

B A N S Y O

五月号

2018. 5



五月の句

僧過ぎて泰山木の 一花落つ

井上玉枝

句集『雨水』所収

句会へ向かう途中、立ち寄った寺での光景とお聞きした。目の前に起きた驚きをそのまゝ詠んでいる。泰山木は高さ二十メートルにもなる樹。初夏、芳香のある乳白色の大きな花を空に向けて開く。

大輪の泰山木ならではの「一花落つ」。

足下の花をじつと観ていて、自ずと生まれた一句だろう。

「楽しんで、苦しんで俳句を作って下さい」。

玉枝先生の言葉が時々思い出される。

(佐藤和子)

平成三十年

五月号

万象

B A N S Y O

二つ折りの恋文が、

花の番地を捜している。

ジュール・ルナール

『博物誌』（岸田國士訳）

万 象

平成 30 年 5 月号

名誉主宰作品 桃の日 大坪 景章 4
主宰作品 ヘイ・ジュード 内海 良太 5

作 品

荒 野 小林 愛子 6
雪 野 飛高 隆夫 6
雛 飾 江見 悦子 7
春 の 雪 福島せいぎ 7
蘆 牙 原田しづえ 8
風 光 山田 春生 8

続・万象と共に ⑰ 方言っていいなあ 内海 良太 9

同人作品

内海良太選 10

同人作品の佳句 内海 良太 33

新同人競詠作品評 沢辺たけし 34

同人特別作品

南都秋色 岸川素粒子 38
井川deレストラン 宮崎みゆき 39

内海良太句集『青嶺』自選句鑑賞⑭

祭馬どうしていいか分からぬ眼 榎本 文代 40
植ゑながら田水眩しと眩けり 柳澤 宗正 40

小林愛子句集『辻楽師』自選句鑑賞⑭

黒川能をんなは土間でもの洗ふ 浅井 敦子 41

万象作品

飛高隆夫選

何草といはず新芽の皆美しと	成瀬真紀子	41
わたしの歳時記「祭」「俳句四季」3月号より転載	内海良太	42
特別作品評(三月号)	水野加代	45
同人作品評(三月号)	広瀬俊雄	46
万象招待席	竹澤竹里	48
雪解風	島田和枝	49
文学散歩⑯ 栃木 司馬遼太郎と佐野	加藤季代	52
俳書探訪	山本とく江	53
蕪村処々⑭ しら梅や北野、茶店にすまひ取 蕪村(安永七年)	福田雅子	54
巻頭作家(四月号)プロフィール 吉野美智子(静岡)	神田美穂子	55
飛高隆夫選		56
万象作品の佳句	飛高隆夫	72
選者のはなし⑱	中村千久	74
添削教室⑤	亀田やす子、山本麓潮	75
「万象」中央句会報(二月)「万象」同人句会報(二月)	桔梗純	76
「万象」東京支部発足三周年記念俳句大会案内		78
珈琲タイム⑯		79
「万象」組織と業務分担・「万象」同人会役員		83
「万象」句会一覧		84
東西南北		84

桃の日

大坪

景章

(名替主筆)

リハビリの疲るるものよ朧月
春の雪見ずに臥しての日々なりし
かあさんと呼べど答へず春休み
久々に妻と逢へたり春一番
退院は春満月のときまり
桃の日にとどく吾の句俳句界
鳥帰る急ぐな空の彼方まで

ヘイ・ジュード

内 海

良

(主 宰) 太

天 気 図 の 渦 う ご き だ し 春 隣
春 泥 を 来 て 病 む 友 と ヘイ・ジュード
春 の 野 へ 厚 き コー ト を 脱 ぎ 捨 つ る
ポ ピ ー 摘 む 鯨 の 海 を 目 交 に
臘 梅 を 見 て 目 薬 の 冷 た さ よ
春 嵐 駅 の 案 内 の な ぐ り 書
鳥 影 の ち ら つ く 障 子 吊 し 雛

荒野

小林

愛子
(副主宰)

ふるさとに八一の書あり深雪晴
雪をんな雁木くぐりて現れしてふ
風や夜はボルシチを熱くして
枯齒朶を刈りをり紙の音したり
寒明けて曳きくる赤い旅カバン
念仏の荒野さすらふ雪解風

雪野

飛高

隆夫
(万象作品選者)

雪かむり狢犬の威を正しけり
たそがれて雪野光を新たにす
星冴ゆるあかがね色の蝕の月
眩しくてその眩しさや冴返る
春の虹立ちしを知らず伎芸天
雨しづか鶯餅を買ひに出る

雛飾る

江 見

悦 子
(編集人)

欠け終はり月茜色春近し
はや翳る溪谷の宿野水仙
参道にうなぎ飛び出る四温かな
節分や鴉甘鳴く上野山
穴稲荷灯に節分の風少し
あれこれと大小の函雛飾る

春の雪

福島せ

い ぎ
(同人会会長)

尼寺に男ありけり年木樵
春の雪からくり人形踊りだす
姫貝やこれはこれとはと僧いへり
寒蛭触るれば舌をしまひけり
くわんおんのみ手のしづりぬ春の雪
まだ慣れぬ遍路が笠の紐結ぶ

蘆 牙

原田 しず
(願 問) え

永平寺 四句

瀬の音は深雪の底や永平寺
回廊は登りばかりや雪しんしん
堂隅に道元像や雪明り
雪の笠おもむろに脱ぐ帰山僧
昨日より今日のさへづり兜太亡し
蘆牙や足跡大き沼のへり

風 光

山 田 春
(願 問) 生

薙刀をかつぎ僧兵なやらひへ
護摩焚いて雪を払へり節分会
月山のみごとに晴れて春立てり
さきがけの紅梅かをる高麗の里
鶯や白湯をたまはる札所寺
風光る人生百年時代なり

方言っていいなあ

内 海 良 太

第158回芥川賞は「百年泥」の石井遊佳氏と「おらおらでひとりいぐも」の若竹千佐子氏の受賞が決まった。

既に多くの書評や鑑賞がよせられて、「万象」でも多くの方が読まれたことと思う。この二作の内、東北弁の題名に誘われて「おらおらでひとりいぐも」を先に読んでみた。東北出身の主人公の桃子さん（作品中では74歳）は夫に先立たれ、孤独と悲しみの中から、尚自由な生き方を見つけていく物語。「人の心は一筋縄ではいがないのす。あつちやにこつちやに揺れ動く、おらの心をしつかりと受けとめてけろ」の通り、終始東北弁が効果的に用いられ、ついつい桃子さんの独自の世界に引き込まれて一気に読んでしまった。

この頃は方言の評価がプラスの方向に向いている。以前は、方言を使うと田舎者よばわりされていたが今はちがう。標準語、共通語と方言を使い分けて面白い話をする、中身のある話をする、説得力のある話をする、これをバイリンガルと言って評価されているようだ。

それにしても「おらおらでひとりいぐも」は全体を通しての東北弁に何故か懐かしさを感じた。その懐かしさはすぐ分かった。数年前に夢中になって読んだ、井上ひさしの「吉里吉里人」だった。1巻834ページどこを開いても東北弁の吉里吉里語だった。この時も方言のよろしさ面白さを堪能させてもらった。

方言の良さを感じた小説に、中野重治の「梨の花」を記憶している。これも全編福井の丸岡弁で語られていて、主人公の良平少年とおばばの会話が特によかった。

良平少年が、ぼた餅をよそにあげようと作るおばばに「できあがったら私にもくれろ」と念を押す場面がある。するとおばばがいう、

「おお、おお、おまえにやらいで、だれにやろぞいや……」と歌うように言う。ものいいの柔らかなさが何ともいえない。方言っていいなあと感じた瞬間である。

同人作品

内海良太選

○は佳句に選ばれました。



札幌 松原智津子

○流水来漁師おほかた出稼ぎに
天窓に冴え冴え赤き月の満ち
寒明くる一步の足裏地の微熱
テノールで出産近き羊追ふ
雪庇仔の声洩るる羊小屋

札幌 岡本敬子

あら炊きや玲瓏として冬の月
真鱈子をこんにやくと和ふ風鳴る夜
四足の狐あしあとなぜひとすぢ
香薰いて雪の底より春立てり
○ミルクいろに入江たゆたひ鍊群来

札幌 濱谷和代

寄生木や夕暮れてなほ雪明り
山小屋の窓獣めく霜の花
断崖の壁に重なる大氷柱
鳥つぶて恵方の空へ真直ぐに
潮の風行きつ戻りつ流水来

札幌 大内和憲

耳鳴るや飛雪のはての日を待てば

雪虫の黒きが雪を割つて出づ
海明けや転舵の波の翠濃し
春宵やカルテの中に身を沈め
抱きし子の重みいや増す寒の明

札幌 紅 露 恵 子

寒雷の匂ひ微かに夫帰る
指編みの指に咲く色春隣
うすうすと真白き月に春立てり
街灯のあかるさ途切れ春の星
すきとほる白肌のごと独活湯搔く

札幌 玉 田 瑞 穂

凍裂の森香しき夜明けかな
たまゆらの光と失せし草つらら
丹頂の倚りより睡る白さかな
海鳴りや念珠のごとき寒北斗
雪駆くる馬のししむら湯気の中

札幌 大内 マ キ 子

幾千の白きたてがみ春怒濤
鬼ひとり煙草くゆらす節分会
寒明けや太鼓乱打の幼稚園

声あげて雪解氷に打たるる子
○早春の海を遙に多喜二の碑

江別 佐 藤

庭の木々我慢がまんと凍返る
ここだけはお祭りさわぎ除雪道
鍊群来予感すままに海のいろ
シャンソンの聞ゆる夜半や牡丹雪
春立つや北方の海輝けり

苫小牧 林

陽 子

日高野をつらぬく川の寒夕焼
鹿の群駆け抜く沢の雪煙
しまき晴れオリオン星座揚げたり
海鼠餅はみ出す豆の黒ぐろと
氷解く音を間近に風の湖

苫小牧 落 合

裕 子

雪晴や木々の影濃き勇払野
日を集む氷像支笏湖ブルーかな
窓の外見詰めてをりぬ冬の蠅
れんげうの枝に色差し春隣
熊笹の乾びし葉音残る雪

哲

苦小牧 榎 美 幸

雪壁の五尺となりし母の家
沼に沿ふけものの跡や新雪に
釣人の沼まで続く櫓の跡
山嵐に穴釣りの背一列に
○多喜二忌や小樽の海の鈍色に

湯沢 小 松 敏 郎

着雪の花咲きし如林檎園
秋田美郷町の青竹で打合うとんと焼の行事
竹打ちやどんだの火の粉宙に舞ひ

○踏ん張りし足跡五千綱引けり
大氷柱雪解雪の穴穿つ
歳旦の櫓を浸す沢の水

鶴岡 阿部 月 山 子

神主に春着の犬の祓ひ受く
秋田の子雪の犬この股くぐる
かまくらに応接室のありにけり
かまくらに蛹のごとく抱かるる
鰯まつり出刃庖丁を売りゐたり
○大鍋に海神招く鰯煮込む

東根 奥山 テル 子

神神し寒明け月山拝めり
もうひと月がまん雨水の雪を掻く
母の忌やねんごろに炊く五加飯
罵りつ唐鋏で割る厚氷
五味五彩膳を作りて初不動

上山 森 和 子

眩しさや羽州山並冬の晴
剪定やほらほんたうの空の色
雪三尺切れば黒土やはらかし
土撒いて堅雪の畑汚しけり
加勢鳥の中に知り人祝ひ水

新潟 佐藤 三 男

地吹雪に地を舐めると歩行せり
一村は同じ名字や深雪村
灯がともりかまくらのごと深雪村
玄関よりスキーを穿いて出勤す
雪晴れて庭に小さなスキー場

新潟 佐藤 雄 二

屋根の雪ばさと落してバス発ちぬ

冬の雷遙かなる死へ合掌す
○梁暗く千の塩引逆しまに
尼寺の触れて重たき実万兩
半ばにて寝落つならひや除夜の鐘

新潟 高橋 ひろ

スコップの先の捲れや雪氷る
しくしくと雑巾刺しや寒き春
ガラス戸に息づけば雪流れけり
雪雲の裂けて天上界の青
雪割りやどこかの家に笑ひ声

新潟 川村 みよき

幾筋も信濃川原のどんどの火
てんぶらの飴玉ほどの落のたう
鬼打豆焼印残る一升枰
保育器に命を紡ぐ梅の夜
建て替への病廊迷ふ梅月夜

南魚沼 森山 暁湖

○元朝や雲のあはひに神の山
左義長の崩るときは炎かな
研ぎ上げし鉈もて開く鏡餅

弥三郎婆の来さうな虎落笛
軒氷柱ひかり絞りて雫せり
朝食手軽がよかり滑子汁

宇都宮 阿久津 勝利

朝焚火夫の船待つ一家族
海鳴りの通り抜け来る雪囲
流木の重なりあうて水涸るる
風荒ぶ耕地整理の大冬田
熊皮に座して櫓火を育てけり

芳賀 大村 かし子

歟先の土の湿りや春立てり
窯出しの庄司の庭に梅香る
肥料屋の新種売り出す雨水かな
剪定や影も整ふ庭の樹々
遠筑波畝真つ直ぐに麦青む

芳賀 見目 トキ子

刺に触れ傷つき開く冬の薔薇
息抜きとサックス吹ける受験の子
遠筑波裾をかくして初霞
凍滝に気動車の窓光らせて

転がりし石の目鼻の雪だるま

佐野 亀田 やす子

退院や庭の紅梅三分咲き

杖の先ころつと二つ龍の玉

つくばひの氷柱に光る雫かな

唇にじゆわつと莓とろけたり

リハビリの足の軽さよ風ぬくし

佐野 増田 幸子

朝の鷺雪より白く啼きゆけり

落の藎半紙幾重に包まれて

ひかり満つ朝の臘梅玻璃越しに

朽運不意池を積み上ぐ筏春の池

くゆり立つ野焼の煙野州晴

佐野 駒形 祐右子

初鏡よはひ重ねし顔となる

唐紙に父の筆蹟冬座敷

探梅や辻にかたむく標石

○凍滝の中やかすかに水の音

八つ橋を渡る靴音春めけり

佐野 加藤 季代

夕暮の空のはなやぎ日脚のふ

卵かけご飯けふより春なりき

立春の鯉水の面に口寄せ来

白梅や孔雀は羽を広げ合ひ

薄氷へ日の滑りこむゆつくりと

佐野 鍋島 広子

城址に残る釣瓶や水仙花

剪定の藤の枝太き空まさを

声高く論語唱ふや梅の花

誕生餅背に笑まふ児や桃の花

室の八嶋弾き初めたる杉の花

佐野 阿部 澄

寒禽や渴きて白き沼の杭

校庭に莓のバルーン春立てり

春禽のつびつびつびと杜の朝

木目浮く黒板塀や梅香る

なんぢやもんぢやの花は知らねど苗木買ふ

佐野 芝宮 留美子

枯葦の水面すれすれ刈られけり

不忍池の枯葦運ぶ筏かな
冴えかへる新月の空縹色
美術館水かげろふの春日入る
古伊万里の藍のやさしき春はじめ

足利 大 木

茂

剪定の枝が逆さに地を打てり
犬ふぐり出口一つの駅舎成る
籤引きに野菜の束も農具市
遺影の間開け放ちたり深雪晴
薬莢の畝間に干ぶ獺期果

さいたま 手 島

南 天

月と日をたつぷり浴びて山眠る
息止めて雛師眉描く初仕事
寒の水ごとりと干して今日を生く
風花や夕べの富士に金を延ぶ
昨日より今日が大事と豆を打つ

さいたま 山 本

右 近

庵主の間水かげろふの春障子
春風をまとひ気散じほまち婆
白梅や乾きの遅き朱印帳

軒深き祇園の置屋紙雛

○雛の灯に把手の光る古箆笥

志木 中 村 千 久

新しき幣立つ祠枯野道

岩肌に小滝しぶきて凍りをり

岩窪に氷の下の蠢けり

山陰の裾は壁なす大氷柱

寒北斗未明の月の沈むころ

さんざめく希臘の女神寒すばる

所沢 三 好 か ほ る

ぼんたんのジャム煮てをれば春の雪

あけぼの杉の梢のけぶれり春の雪

図書室に少女一人や牡丹雪

受験の子黒き鞆の持ち重り

室の蘭描くむらさき色さして

所沢 水 野 加 代

左義長のしまひの灰を燃え立たす

踏んでみる明日館の霜柱

ふきのたう大きく描いて姉の文

董に水を日時計は十一時

ふらここは立ちて漕ぐべし高空へ

所沢 森岡 恵子

中天に風鳴り通し冬木の芽
寒雀いつせいに地にこぼれたる
岩場より鷗飛び立つ寒の明け
雪晴れや山に手を上ぐ人の影
残る齡短きが良し春帽子

入間 山口 素基

草田男の沖より春となりにけり
燭の火のゆらしてゐしは紙ひゝな
春蘭に風ややさむし朝明かな
恋の猫恋の滲みゐしまま眠る
春泥を墓と気づかず跨ぐなり

千葉 田中 道江

地を搏てる鴉むらさき久女の忌
叱られて子は冬帽子くしやくしやに
鶯かへて右手に握るあんず飴
紅梅の満ちたる空の重さかな
鵲鴿を交へて春を遊びける

酒々井 竹澤 竹里

雪うさぎ月は食はれて赤銅に
肉球の足跡残す雪うさぎ
雪原に一筆書きのけもの道
積む雪を崩して居りぬ猿の群
石垣の上に竹垣椿咲く

佐倉 内海 保子

灯台のレンズのみどり春隣
漁師町タンスの上の紙雖
いには野に野を焼く煙濃き淡き
犬ふぐり一とかたまりに古墳口
米を研ぐ今日茂吉忌と言ひながら

佐倉 大内 佐奈枝

混み合へる追儼待つ間の鴨なんばん
大黒舞小槌より春振り出しぬ
節分祭額に餅のとんで来し
○薄氷の水際の草を離れたり
三匹を一連といふ目刺かな

佐倉 三屋 英俊

読初は地図見ながらの土佐日記

故郷や雪の下より瞽女の唄
雪に立つ札「この下に高田あり」
立春や酒出来立ての朝搾り
太陽のやうなタンポポ一つ咲く

四街道

奥

太雅

着ぶくれて税申告の列に付く
マスクしてマスクの人と声交す
雪止めの瓦乗り越すしづりかな
花柄の安房の太巻鬼やらふ
まんさくや鉄に錆浮く外階段

船橋

大坪

貞子

急変となりて二月となりにけり
凍解の道をば夫に会ひにゆく
夕闇の独りとなりぬ亀の鳴く
しやきしやきとレタスの甘さ春來たる
穂の芽のからりと揚がり風邪かるし

船橋

山下

良江

畳屋の足で仕上ぐる冬座敷
耀ひてあかがね色の寒の月
雪残る階段夫と腕組みて

麦踏み of 畑巡り来て白鳳仏
○白子干知らぬ顔して猫通る
膨らんで上げ潮迫る春干潟

船橋

大山

春江

池凍る縮緬皺をそのままに
大寒の弓張月の蒼さかな
雪來るか街灯昼を灯したる
喜多院のきしむ回廊寒戻る
かるやかに軋む風車や寒明くる

船橋

赤堀

洋子

大寒や塵も残さず引越せる
女客ばかりの見舞ひ小正月
節分や上野に響く時の鐘
朱唇残る上野大仏春隣
うけら神事梅の大枝桶に活け

船橋

久保村

淑子

しはぶきてカチカチ踊る加持の僧
大白鳥水かげろふをまとひ来し
一斉に背伸びする亀寒明くる
紅梅を移る目白の声細き

桜草小指の丈にはや薔

船橋 片桐 帆 一

ふくら雀芭蕉の句碑にかたまりて
寒声や風に途切れるおけさ節
氷結の不忍池鳥の行方かな
池の端冬帽目深に鳥寄せる
緋寒桜運河に黒き影うつす

柏 山本とく 江

先立ちて光圀公の梅真白
飛びさうな矮鶏の羽搏き草萌ゆる
初東風や赤子この世の一步二歩
八橋や水中に萌ゆ菖蒲の芽
やはらかに白梅映す不老の井

柏 松原三枝子

寒天や神木の葉に白き絮
寒の灯のきりきり完成近き家
冴え返る街灯の下野菜売
大股に歩く鴉や春淡し
退院の母への安堵子は流感

婦市讃

柏 内田郁代

暖房を効かせて待てり選挙カー
当選の万歳三唱凍とばす
わらわらと道にこぼるる寒雀
寒晴や武州連山あきらかに
三叉路に右成田道囀れり

柏 古川京子

いつしかにしづる音絶え星しづか
白鳥の散らばる湖の青さかな
土手焼や土竜あさうなところより
お水掛雪解雪を加へたり
弁天の白きかんばせ春灯し

流山 沢迎たけし

買初は湯島の路地のカルメ焼
道端の雪塊汚れ鶯替ふる
○吉野紙通したやうな春日かな
水底の石も朽葉も温みたり
地下鉄の電車に春日お茶の水
雪晴や長靴竿の先に干す

流山 穂 莉 照 子

薄氷の中に木の葉の立ち上がる
洗ひたる青菜しやつきり春立てり
春来るとみな覗きたる不老水
逆立ちの尻弾ませて春の鴨
人の世に汚れて残る雪だるま

浦安 田 中 幹 也

手術了ふ浅き眠りに春の雪
病床の吾を見下ろす春の月
春雪のとどめなき夜ボレロ聴く
薄氷や雑魚うごめきて日を揺らす
古書店に猫の出口や春紫苑

東京 内 藤 恵 子

餌付け終へにこり酒酌む白鳥守
赤き月あげ白鳥の鳴きたつる
雨けふる空より戻る大白鳥
不忍池の打ちあげられし蓮の骨
寒鯉の重なり合つて動かざる

東京 谷 田 部 栄

丸猫きて地べたの遊び春隣

寒明けや奥歯の見ゆるまで欠伸

青梅路は湧き水多し榛の花

ソムリエのコルクをぽんと抜きて春

○民宿に木の芽の旬の来たりけり

山笑ふ子宝の湯に老夫婦

東京 須 賀 允 子

着ぶく^{眉乃先生 一月三十一日}れて集ふ句友や師の忌日

師の墓へ溢るる供花や寒晴るる

安吾の忌人形町をうろつきて^{人形町二句}

人形町行き交ふ女春シヨール

龍天に兜太の舌鋒今一度

東京 名 和 政 代

○わが机上獺の祭となりにけり

探鳥の舟はのたりと春の沼

春の山槌の子見しと言ひ張る子

定食に小梅添へたる梅まつり

梅の香や仮橋の橋の傾ぎたる

東京 山 本 絢 子

名残り雪永久の別れとなりにけり

地獄門に影を落せり三十三才

水底の裸木揺らし獺現るる
嘴交はす音のはげしや丹頂鶴
春の野をいくつ越ゆるや妹葬る

東京 藤田 裕子

姿見の中に春着の母の居て
ピンクよりグレー似合ふ子春近し
○お下りの服の色色獺祭
かがまりて古草の匂ひ日の匂ひ
雪残る熊笹の中動くもの

東京 赤松 郁代

大寒の明けの三ヶ月尖りたり
日かげりて山の南天なほ赤し
外苑の苔を持ち上ぐ霜柱
沼舟の枯芦原を出でにけり
白髪之三つ編みを解く初湯かな

東京 島野 ひさ

月蝕を最期までみてゐる寒夜
寒明の噴水高く高くのび
江戸弁のからくり時計柳の芽
梅白し黒板塀の人形町

町裏の風の匂ひも春めけり

東京 佐藤 晴子

夫在らば戌年ならむ初御空
吉札やどの道行くも恵方かな
ユトリロの冬木立ゆく夢や見む
深雪晴思ひ出多き加賀の里
立春の光眩しむ兼六園

東京 加賀 葉子

切株にギターケースや犬ふぐり
黒塀や椿の鉢に貝の殻
ふり返りつつ鉄柵をゆく春の猫
春の日や柔ら抱きて宮参り
砂山の色に残雪勝手口

東京 久留島 規子

猿まはし成田詣の参道に
護摩堂へ大注連飾くぐりけり
埋もるる遊具の脇に雪だるま
真白なり晴れて春立つ富士の峰
校庭に親指ほどの落のたう

東京 中村 弘

殻堅き小さき一粒寒卵
閨門の信号青に春星忌
昇る日を遍くはねて軒氷柱
○霜柱地の皮剥がし立ち上がる
大寒の動く歩道を小走りに

小平 吉村 光子

終活をはじめし夫や牡丹の芽
大試験孫よ力を出し切れと
寒中や挿し木の薔薇が新芽ふく
蜆汁單純にして力つく
虫麻呂を逃れし椿咲きにけり

立川 疋田 華子

寒鴉飛び交ふ朝人逝ける
かいぼりの泥のつややか春隣
立春や若草色の靴を買ふ
クロツカス縄文住居あとにむる
こぶしの芽整形外科にかぶと塚

町田 吉中 愛子

雪催ひ般若心経二度読んで

新雪へ五体投げ出す下校の子
買ひ手築地市場二句すぐ決まる鮪の大目玉

寒蜆箆を叩いて売り尽す
如月の竹の輝く地鎮祭

町田 広瀬 俊雄

白梅や磴のけはしき牛天神
かいつぶり潜りしあとの泡ひとつ
川岸にカヤックを干し獺祭
冬満月地球の影を写しけり
マロニエの花芽ふとぶと天を突く

青梅 小林 珠江

朝の日にお手玉ほどの露の蝨
もろこしの黄を吊る納屋に斑雪
斑雪山鵲の声吹きもどる
うづら豆ふつくら煮上げ寒見舞
帰る鴨岸にころころ胸並べ

横浜 榎本 文代

冬薔薇や錆びきつてゐる蝶番
医師の背を見つめてゐたる寒さかな
冬の蛾のへばりつきたる掲示板

小雀の唾へそこねし鬼の豆
寒明けや鉄骨高く吊り上がり

横浜 浅井 敦子

日の当たる橋わたり来て初閨魔
裏山は夕日まみれや鬼やらひ
夕空に風船流れ鬼やらひ
春の風邪一日を寝たり座つたり
干若布触れ合ふ音の生まれけり

横浜 西本 才子

門川や戸毎の雪を掻き落とす
大釜に豚汁にたち追儼寺
梅日和木椅子に本を伏せ置かる
○四阿に春泥おとす女声
仏壇へふるさとよりの山椒味噌

横浜 川越 昭子

黄ばみ染むミモザの花芽しなやかに
海鼠壁つづく川沿ひ初詣
恋猫の長き髭なり寄りて来し
寒椿 大山道へつづく道
神の梅巴御前の井戸深し

横浜 久松 和子

寒もどり薬はのどにひつかかる
げんげ田に跳びこむ猫や恋終へて
雪虫や湯沢の駅に降り立てば
如月や眼を射る光眼底に
大根架高く連なり風粗き

横浜 寺沢 千都子

煮凝や鯛の目玉の澄みゐたり
冬月蝕こむら返りのははかなり
三つ編みのぴんととび出し毛糸帽
寒水に少し湯を足し鉢花へ
繕ひし竹垣にはや雀来る

横浜 大橋 雅子

寒肥や蟬の抜け殻転げ出づ
赤銅の球体となり寒の月
赤飯を振舞はれたり針供養
山裾に芹摘む媼鳶鳴く
薄緑の天麩羅庭の落の蓋

横浜 福田 雅子

あまたたび席譲られて冬の旅

旅の日の夕餉にうまき大根飯
日記帳何も書かずに二月なり
辛抱や湯にも水にも指荒るる
豆はやす昔家長は大音声

横浜 柳 澤 宗 正

寝佛の尾根くつきりと寒茜
生かされて八十歳や豆を撒く
十人を育てし妣や針供養
犬ふぐり極楽寺坂の師を偲ぶ
玄関に靴の運びし春の泥

横浜 山 崎 郁 子

無言館の画集広げて春の雪
つるはしで根雪を打てり加賀の街
春花供ふ鳴立庵の開祖の碑
越中の波のしぶける雪起し
○父母在りし日のごと飛べり浪の花
五箇山の葉を添へてかぶら寿し

横浜 田 賀 煤 恵

川底に波の影あり春浅し
紅梅の庭に前足たたむ猫

浮雲の薄くれなぬや鳥帰る
ミモザ咲く坂に遠富士望みけり
山茱萸に冷たき風のある日和

川崎 山口 千 代 子

御神渡り五年振りとして盛り上る
早春の多摩川の風びようびようと
墓石の愛の一文字春うらら
春の雪紺の瓦に残りたる
春寒や戦ひ詠みし兜太逝く

川崎 新 妻 奎 子

不規則にどんどの炎裏返る
船を出す胴まん声や海雀
多喜二忌の海がうがうと咬むごとし
憤り残す背中やちやんちやんこ
鱒跳ねて川面明るき法然忌

鎌倉 恒 川 清 爾

待たれたる三河万歳土間狭し
天窓の玻璃歪みたる寒さかな
尼寺の潜り戸小さし冬桜
山門の門軋む寒さかな

蒲公英や磯に干されし大漁旗

逗子 卯辰 美苗

○寒泳の顔を濡らさぬ少女かな
富士額の力士に寒の力水
春立つや一筆書きにト音記号
遥かなる母に伝ふる春立つを
貝だまり踏む音に寒明けにけり

横須賀 武井美代子

水仙や午後は海鳴る城ヶ島
波先のすぐそこにあり水仙花
待春や庭師がはこぶ竹の束
臘梅や鎌倉の路地いくまがり
沈丁花姉の忌日の夜を匂ふ

横須賀 織田みさゑ

誕生日梅一輪の至福かな
春暁の阿夫利嶺はるか濃むらさき
獅子舞の耳を正して祝詞聴く
耳疎く日向ぼつこに並びけり
谷戸奥は深々として冬銀河

茅ヶ崎 三澤治子

どんど焼の火の粉砂浜ころがり来
どんど果て闇の海面に月一つ
逆きし眉乃先生へ
元日の青きドナウは聞きました
マニキュアの指そらし割る寒卵
○初鏡シングルライフの九十路
賀詞交はす病む妹の眼にポロリ

伊勢原 佐藤和子

立春の狭庭雀の小競合ひ
鰯焼く匂ひひろぐる午祭
末黒野を一本の川蛇行せり
畦焼の果てて男の立話
春浅き箱根の山の暮色かな

松本 中條今日子

寿の一字麗し年賀状
福達磨黒い目玉の揃ひけり
冬山の上に大きな白き月
○新しき湯桶をおろす初湯かな
熊笹の木々の寒気を守りけり

静岡 大村 峰子

薄氷や風の寄せたる波模様
雪搔や車庫へポストへ身幅程
叱らるる犬寒星へしばたけり
雪晴や羚羊の跡湖へ向き
○薪棚の薪前のめり雪解村
獵期果つ犬疊り日をよく眠る

静岡 曾根 満

獵解禁なにやら鳥の小声なる
目をつむり焚火の煙やり過す
弾初や登呂の埴輪が琴を弾く
水音や冬青草のひとところ
鑽り火もて弥生の裔のどんな

静岡 藤原 千代子

満身に管繫がれて寒を病む
唸りつつ二月の路地を集塵車
農小屋の屋根に槌音寒明くる
薄鈍の爪を剥き出す耕耘機
長閑さや引つ繰り返し船洗ふ

静岡 海野 みち子

読初は奥の細道漫画本
めんぱに豆供ふるだけの鬼やらひ
春めくや卒寿に届くファッション誌
介護所にインフルエンザ貰ひけり
春寒し何しに來たか忘れるて

静岡 宮崎 知恵美

庚申塔並ぶ裾なり仏の座
階にブーツの一つ初観音
観音へ数多供ふる鏡餅
氷柱太る鳶の羽根を閉ぢ込めて
初神楽剣の舞の幣飛ばす

静岡 宮崎 みゆき

初松籟神馬の瞳輝けり
隙間風釘に掛けある鹿の角
深き夜や汗飛ばしをる里神楽
雪しまく吊橋の先村ひとつ
二つほど春椎茸を見つけたり

静岡 荻野 加壽子

簡にして命満ちたる寒卵

羞ひは色に出でけり寒椿
薄氷や鳥の子色の空暮るる
○春氷和紙一枚の厚さかな
薔薇の芽にはや人拒む棘の数

静岡 長 島

操

木洩れ日をまあるく弾く藪柑子
はらからの集うて明くる大旦
大晦日茅の輪を潜る杣の村
寒猿の群や櫟を占領す
子狸来軒に大根を喰うてをり

静岡 小 川 明 美

冬晴へ社の屋根の反り強し
熊穴に隠る空谷笹の揺れ
冬ざるる魚道に鳥の影ひとつ
蕎麦搔や箸に香りを巻き付けて
開け閉めにてこずる板戸炭火美し

静岡 藤 本 節 子

づかづかと象の水場に寒鴉
○霜柱丈そのままに日暮れけり
母の忌の三日過ぎたり梅の白

春寒やためらひて開く自動ドア
一歟を入るる大地や春動く

静岡 大 長 文 昭

大寒やけものの骨の白白と
雪解水煉瓦造りのレストラン
竹を割る音の乾きや冴返る
柴垣を結ふ指の先春立てり
犬ふぐり踏みつ峠の古戦場

静岡 加 山 ひ さ 子

意に染まぬ風にも揺るる枯芒
年の豆厨廁へひとり撒く
八方に飛ぶ槌音や春來たる
三桎の薔三つの俯けり
鬼は外弾める声をはばかりつ

富士 神 田 美 穂 子

凍雲のほどけて湖に逆さ富士
寒行や雪の浮き立つ闇の富士
水仙の崖にとんびの声と影
赤人の歌碑を眼下にいかのぼり
水の声土の声聞き梅探る

みよし 山内 なつみ

孔子像の髭へ影して桜の芽
寒明や明るい色の服買ひに
○梅咲いて吾は卒寿を迎へけり
鶯や娘の家に引き取られ
母と娘やうやく無口毛糸編む

富山 若 島 久 清

来て見れば八尾坂町雪流し
停電の闇の底なる虎落笛
切身より粗を煮込んで鯽大根
身ごもりに目貼り重ぬる親ごころ
奥津城^{母の納骨}へ割つて辿れりざらめ雪

射水 成瀬 真紀子

大屋根の根の繋がりにし大氷柱
子の作る面の迫力鬼やらひ
雪の道互ひ半身に擦れ違ふ
嵌め終はるジグソーパズル春隣
雪道に畑より続く春の泥

金沢 岸 川 素 粒子

強面の作る綿菓子七五三

仏吐く聖の口や京時雨
聞かざる肺のかげりや年詰る
年の瀬や三増五減の住所録
夢捨てて捨てて卒寿のおでん酒

金沢 田 村 愛 子

どか雪に十日籠りて酔にむせぶ
雪見舞青菜に添へてパン届く
北風荒れや無人の小舟またも着く
三代の帯戸の艶や日脚伸ぶ
大漁旗かかげ起舟の木遣唄

金沢 新保 ふじ子

天と地のさけんばかりや鯽おこし
初蝶の飛び立つ風をえらびをり
のど飴を口で転がし日なたばこ
水温む散歩の歩をばのぼしけり
白山に一礼をして寒肥まく

金沢 井 村 和 子

天領の庄屋の名残り太氷柱
捜しもの此処なところに雪しづる
北大路行き行く二の卯詣かな

綾取りの梯子手渡す春炬燵
涅槃図を拝み句座にかしこまる

金沢 中 條 睦 子

口笛にひよどり応ふ春隣
家の灯のオレンジ色に深雪村
ひもすがら寺の雪解の賑やかに

○方形に田の雪開けて神送る

涅槃会や寺の奥まで緋毛氈

金沢 今 越 み ち 子

豪雪に予定の狂ふ事ばかり
初午や照り翳りして梅の橋
ボランティア露地に作りし雪の壁
飯蛸を潮入川の橋に釣る
二ヶ月の雪にてこずる昨日今日

金沢 伊 川 玉 子

福耳は父似と云はれ屠蘇を酌む
左義長のけむりに追はれ烏どち
かいつぶり飽かず見てゐる橋の上
鶯張り歩むや足裏冴え返る
○白峰の豆腐を苞に日脚伸ぶ

金沢 伊 藤 美 音 子

○ゆつくりと振子のリズム福寿草
超人のごとサイロ立つ雪の原
かじかんで違ふる紙の表うら
天狗棲むてふすだ椎に風花す
身を縮めちぢめ哭く象涅槃絵図

金沢 高 田 た み 子

浄土句碑隠してしまふ今朝の雪
買出しのリユック膨らむ深雪晴
欣一の色紙清しき涅槃寺
黒髪をきりりと束ね鷹放つ
空中の餌捕る鷹の疾さかな

金沢 佐 野 和 子

旧正の枳の実晒す細川
長髪を束ね少女の弓始め
チエロ奏者雪の馬坂降りて来し
雪しまく奥鶴来より訃の報せ
○売薬の雪見舞とて蜂の蜜

金沢 後 藤 桂 子

春寒の声裏返る近江町

凍ゆるむ瀑布天地の色毀つ
乱世へ警策の音牙返る
蠟梅の香りを解く風の芯
たんこぶを撫で合ふ兄妹桃の花

金沢 豊田 高子

いしる鍋浦曲の宿の掘炬燵
大鳥風の二月を太く啼く
茶屋街へ春呼ぶ笛の音高し
楓の芽秘仏に隠れ十字かな
あかときや春霜結ぶ百度石

金沢 松井 佐枝子

○雪吊の緩みて鳥の声緩ぶ
きさらぎの朝日きりと戸のあはひ
手作りの色ふくふくと蓬餅
雪解して光をこぼす樺大樹
残り雪日当りに撒く路地暮し

内灘 塩井 志津

御鏡の割れある清盛神社かな
待春の差し潮走る厳島
水軍の母なる海の牡蠣田かな

まなかひに平家納経灯牙ゆる
鶴嘴の出番や太き固雪に

七尾 谷 渡末 枝

喪の服を袍につむる雪の夜
潮入りの川に迫り出す牡蠣打場
雪曇り利休鼠の七尾湾
立春の影の仄かや手織機
金輪際雪はいらぬと雪を掻く

敦賀 石田 野武 男

水の綾割つて潜れりかいつぶり
鶴亀を織りこむ緋春隣
牛に出し産褥熱や水ぬるむ
雪間草仔牛に角の生えはじむ
薄氷を踏む仔羊の二歩三歩

敦賀 山本 麓 潮

大往生といへど旅立ち雪の哭く
着飾れる御供の童女午まつり
午まつり禪一つの禊かな
薄氷を踏みしめ余呉の観音講
雪解村数珠繰りの声昂れり

敦賀 山本みゆき

雪椿大往生の黄泉路かな
雪しんしんふつくら煮ゆる丹波豆
水激つ熊川宿の蓬餅
川沿ひに並ぶ酒蔵猫柳
道元の越えし峠や草芽吹く

敦賀 倉谷紫龍

萌黄たつ水干みだれ鞠始
冬の雷蔵王権現威しけり
軒低き子規庵ぬくる隙間風
箸研ぎて貝摺ひかる寒の水
寒漉や波うつ槽の仕事唄

敦賀 倉谷ます美

ふくべ吊る出世稻荷や初詣
洛北や小花ばかりの寒桜
注連ゆれて太閤さまの虎の石
霊玉を求め競り上ぐ荒男
霊廟へ御膳を供ふ初大師

敦賀 齋田勝子

お降りや漆艶ます大鳥居

羽子板や柘植の簪はみ出せり
冬深し船板塀のつづく町
淑気満つ三連釜や京町屋
離郷子の鞆はみ出す破魔矢かな
徳島 福島 吉美

初日射す大河河口の浮き玉に
若潮の満ちて富士壺息吹きけり
玉簾投げて竿なす初芝居
初漁のうつばを洗ふ棕栢束子
鏡餅楔を打ちて開きけり

徳島 村上和義

白梅や酒屋に残るはね釣瓶
春風や原生林の蠢きぬ
椿落つ崖の迫り出す漁師町
春愁や町川に立つ人柱
窯跡に花瓶のかから地虫出づ

室戸 安岡みさき

大西風や漁網で囲む浜の畑
セーターに毛玉育てて籠りけり
遠洋の子の魚臭ある布団干す

○船魂の餅ひび割れし操舵室
磯菜摘むことも手慣れて岬に住む

室戸 仙頭 宗峰

妻入院一人の膳の冴返る
リハビリの妻に春寒容赦なし
下萌や此処も大師の踏みし跡
土佐湾の東風に溢るる白兎波
不動岩春濤華として浴ぶる

那覇 伊舎堂根自子

幼な児の歩みの遅速花すみれ
よちよちの児のタンポポへ手を伸ばす
兜金子兜太師 二月二十日死去太師よ逝きしあの世は平和のみ？
街なかの不発弾処理鬼餅寒
木の芽張る山原の里へり聶音

那覇 前田 貴美子

願がんと解きの時ゆるやかに過ぎゆけり
潮じめる風の翳や苗障子御願解うがんととき 旧十二月二十四日

緋桜の満ちゆく早さ島御願
平成の終る日決まり風の空
永き日や出小屋に犬と文庫本

那覇 大湾 宗弘

のびきつて春の海鼠の潮溜
通園のバスの中からしやばん玉
ぶらんこの鎖つめたく暮れにけり
朝寝坊予定を一つはづさうか
推敲のペンを落せり目借時

那覇 比嘉 半升

菜の花やボンタンアメの立看板
屋根獅子の尻尾に結ぶ風の糸
春昼の刳舟ひとつ舟揚場
奥津城に赤秀あこう大樹の芽吹くなり
天霧らふ三日月高き雨水かな

那覇 中本 清

波音を遠く石尊の光搔く
引く波に戻らぬ貝や白薊
嶼や島の真中の亀甲墓
旧正や礁あらはに海昏るる
蠹しゅんといふ吞屋のありき二月尽

春深し火ひぬかんの神かみ記る白き飯
宜野湾 呉屋 菜々

火の神の灰を均せば囀れり
日永しや巻貝ころげ珊瑚礁
手底で久高島眩しむ石尊摘
花冷の空の明るく身罷れり

宜野湾

いぶすき

幸

待春の鯉は浮力をとりもどし
歩く気になり早梅に会ひてより
地蔵尊のほとり地獄の釜の蓋
盆栽の瘤の百年緑立つ
ものの芽や鼓動ひそかに地に満てり

西原

宮城

勉

二の郭へ胸突き坂や石落あかり
椿落ち実生の苗を撓めたり
咳薬効かぬ夜更けの恋の猫
かけられて象の喜ぶ水の春
佐保姫の衣かがよふ礁湖かな

豊見城

渡真利真澄

立札に午之方火之神初御願
初起しは男ばかりや王の裔
御願所に風の一陣春落葉

初起しは王正の仕事始の儀礼

春泥に靴跡深き壺屋窯
飯噴いて永き日の窓曇らす

謹告

三澤 いづ子氏（「万象」同人）療養中のところ
三月二十日、逝去されました。

享年八十九。

謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

万象俳句会

万象基金のご報告

臼村喜久代 三口

匿名希望 五口

三澤いづ子 一五〇〇口

浅井敦子 一〇口

匿名希望 五口

須賀允子 一五口

（平成30年2月27日～3月27日現在。受付順・敬称略）

ご協力に感謝申し上げます。
「万象」発展のため、大切に
使わせて頂きます。

なお、平成29年4月から
の基金累積は一八六七口、
三七三万四千円となりました。

万象俳句会

同人作品の佳句

内海良太

ミルクいろに入江たゆたひ鯨群来 岡本敬子

季語の「鯨群来」にはもうお目にかかれないものと思つていた。なかにし礼の「石狩晩歌」の歌詞で鯨の浜の様子を想像するにとどまっていたが、実景を具体的に描かれた作品が見られたのは嬉しい。入江がミルク色になるほど鯨が押し合ひながら押し寄せてきた作者の大きな感動が読者に伝わってくる。

踏ん張りし足跡五千綱引けり 小松敏郎

綱引きは小正月の占い行事。村対抗、部落対抗で行われ、勝った方に豊作が恵まれるという。

句はその行事が終わったあとの属目。足跡を丁寧に写生しているので雰囲気はよく伝わってくる。

へおびたゞしき靴跡雪に印し征けり 欣二に共通したものがある。

梁暗く千の塩引逆しまに 佐藤雄二

「塩引」は塩を濃くして鮭を塩蔵したもの。作者は新潟の人。新潟といえば村上の乾鮭を思うが、千匹もありそうな鮭を梁に吊るし干しているのが圧巻。新巻鮭を作る老舗の工房をのぞき見たような気がする。

吉野紙通したやうな春日かな 沢辺たけし

うららかで暖かで、あわあわとした春の日差。比喩に吉野紙の特性を配したのが手柄。これまでもありそうな比喩だが、私にとっては初めて見る配合で新しみを感じる。

季語と事物の新しい関係を発見するのがこれからの取合せ俳句の行き方。

父母在りし日のごと飛べり浪の花 山崎郁子

帰郷した折に、磯辺に吹き上げられる浪の花を見ての感慨。いまはもう両親も亡くなっているが、共に見た自然は変わらぬ景色をみせている。同時作に「越中の波のしぶける雪起しも骨格の正しいいい句だ」と思う。

新しき湯桶をおろす初湯かな 中條今日子

作者が分かってみると、鑑賞の幅が広がる。作者は松本市浅間温泉で温泉旅館「菊之湯」を経営する女主人。

お正月のお客さんに檜の香の桶を使ってもらおうと用意したのである。お客さんにとっては経営者の心配りがうれしい。即物的な句には力がある。正月の明るいめでたさのある句である。

薪棚の薪前のめり雪解村 大村峰子

冬が来る前は軒下に整然と積まれていた薪も、雪解の頃になると積み荷が崩れるようになってくる。その様子を「前のめり」と写生したところがいい。実景を見ることによって日々新たな認識を加えることが俳句作りの喜びである。軒先から雪解しずくの落ちるのが見えてくる。

新同人競詠作品評

沢辺たけし

冬の梅

片桐帆一

万太郎旧居の板壁 冬早

湯島天神一段ごとの冬の梅

天神の正午の日時計冬至の日

久保田万太郎の旧居は湯島の近くにあると聞いているので、この三句は同じ日に作ったのだろう。三句とも動詞がなく、肩の力を抜いたスケッチのような感じである。

一句目、最近では珍しい「板壁」が、少し反って日を受けている。二句目、「湯島天神」の男坂の石段か、それともまだらかな女坂の石段か、一段変わるごとに「冬の梅」が違う表情を見せる。この一、二句目は固有名詞が生きている。三句目、「冬至」と「日時計」の取り合わせが面白く、「日時計」の影に思いを馳せるが、「天神」は要らないのでは。言葉を減らせば、伝えたいたものがより明確となる。また「冬至の日」の「の日」も無くてもよい言葉である。

初句会

川村みよき

谷風や縮緬皺の初水

障子より白き寒さの覆ひくる

初句会手書きの地図の案内状

一句目、「縮緬皺」が池や水溜りに張った「初水」の感じを言い得ているが、「谷風」が私には解り難く、「縮緬皺」の原因を言っているようにも思えた。二句目、「白き寒さ」がこの句の手柄で、季語は「障子」である。「徒然草」に「家の作りやうは夏をむねとすべし」とあるように日本家屋は基本的に冬には適さない。よって紙の「障子」では寒気をしのぎきれないのは確か。三句目、いつもの場所とは違う「初句会」の会場、「手書きの地図」が、気の置けない仲間の集まりを感じさせる。句会の後には新年会でもやるのだろう。

受験の子

見目トキ子

月明り鉢巻きりと受験の子

初暦まづは受験日二重丸

煙から視線はづさぬ炭焼夫

受験生が居ると、その家族も大変になるのは昔も今も変わらないようだ。一句目、「月明り」は秋の季語、「受験の子」は春の季語。他の六句は冬又は新年の季語であり、配列を考えると、この句はいつの季節なのか混乱する。題名を付けた連作の場合は注意が必要。二句目にも「受験日」はあるが、「初暦」が季語になるのは明確。一、二句目ともよく見かけるパターンなので、独自なものが必要では。三句目、私は炭焼作業を実際に見たことはないが、この句からは作業の大変さと真剣さが充分に伝わってくる。中七の「視線はづさ

ぬ」が確かな写生。「炭焼夫」が見えてくる。

冬の朝

芝宮留美子

けがれなき黄に冬蝶の生まれけり
向き向きに辛夷の冬芽躍動す
やはらかき手組の紐や冬椿

一句目、「けがれなき黄」が「冬蝶」の儚さを一層際立たせているように感じられ美しい句である。俳句は理屈じやないというが「生まれけり」が気になる。作者は冬に羽化の瞬間を見たということか。それとも、そこに存在することを「生まれけり」と言ったのか。二句目、「向き向きに」に「辛夷の芽」に対する写生の目を感じられる。下五の「躍動す」は作者の主観。難しいが、物を写して、物をぶつけて、その躍動感を表現したい。三句目、「手組の紐」の美しさを凜とした「冬椿」が表現している。「冬椿」という言葉がぶつけた成果。この三句を含め、作品からは作者の繊細な感性が窺えるので、その感性を更に磨きをかけ、活かしてもらいたい。

思ひ出の故郷

恒川清爾

蓬餅作る母の手草の色
春泥や父の長靴大きな
障子貼る届かぬ棧へ祖母の腕

題名の通り、作品を作者の子供の頃の思い出で纏めてある。ここには家族の句を取り上げた。一句目、「母の手」の「草の色」に作者の思いがある。二句目、子供の頃に誰もが思う父

の大きさを素直に表現。三句目、「届かぬ棧へ」が具体的に祖母と子供の姿も見えてくる。

作品のどの句も変にひねらず、素直な作り方に好感をもてるが、思い出を句にしているため、甘い感じになっているのも否めない。

冬の雁

霧田勝子

寺領あと湖を俯瞰す冬木立
冬の雁青葉の笛のよき音色
直弼の茶室を飾る冬椿

一句目、「湖を俯瞰す冬木立」は景の奥行が感じられ、季語も利いているが、上五の「寺領あと」が唐突に思われる。提出された作品には、この句の前に寺の句があつたようだが、連作の場合でも、一句の独立性は保ちたい。二句目、「青葉の笛」と言う「広辞苑」にも載っている有名な笛で「冬の雁」と響き合っているように思えるが、下五の「よき音色」の「よき」は要らない。三句目、「直弼」と言う桜田門外で非業の死を遂げた大老の井伊直弼だが、その「直弼の茶室」と「冬椿」は悪くないが、「飾る」は言わずもがな。二、三句目とも主観的な言葉を排して客観的に写しとった言葉を。

千本松

中村弘

清流の光に紛れ糸蜻蛉
青嵐千本松のみな傾ぐ
立ちあがる卯波に青き海透くる

新同人競詠作品は作句依頼時期と提出期限により冬の句が中心となつてしまふのだが、この作品は夏の明るい句が中心。一句目、「光に紛れ」が「清流」と「糸螯蛉」の美しさを出している。二句目、「千本松のみな傾ぐ」は一つの発見と言つてもいいが、「青嵐」で因果関係のように感じてしまふ。三句目、「青き海」と白き「卯波」のコントラストが美しい。また「透くる」に作者の写生の目を感じられる。一句目と三句目は美しい景を素直に詠んでいて、これはこれで良いのだが、もう一步踏み込んだ独自の切り口のようなものをこれからの作句活動に期待したい。

落鷹の風

中本

清

黒潮のぶつかる岬返り花
落鷹の風が哭きたる御嶽杜
海を出て夕月昇る甘蔗穂道

一句目、「黒潮」のうねりと岩に碎け散る波の白さが、季語の「返り花」によつて、より鮮明となる。二句目、「落鷹」は沖縄独特の冬の季語。鷹の差羽は秋に本州や九州から南方へ渡るが、その途中に病氣や疲れて南方へは行けず、宮古諸島や琉球諸島で冬を越すものを「落鷹」と言う。「御嶽」は沖縄では神を祀る聖所。この句、中七の「哭きたる」を、どうとるかで評価が分かれるかもしれないが、「落鷹」「御嶽杜」との言葉のバランスから良と感じた。三句目、砂糖黍畑の沖縄ならではの景を詠んでいるが、上五「海を出て」の「て」が

説明に感じられる。「て」の使い方は注意が必要。

全句とも沖縄色がたつぷりの、観光俳句とは違う、正に沖縄に暮らしている人の作品となっている。

夢香山

松井 佐枝子

琅玕の雫目に染む近松忌
一枚の空剝がれたり鱒起し
団栗に赤き冬芽や耶蘇の谷

一句目の「近松忌」は陰暦十一月二十二日、この「琅玕」は青竹の美称。濡れた青竹は美しく「近松忌」に相応しいが、難しい言葉は使わずに普通に青竹と言つても良いのでは。二句目、季語の「鱒起し」は北陸の鱒漁が始まる頃の雷。中七「空剝がれたり」は、空の様相が一変した事だと思ふ、言葉としては大胆で面白いが、今一つ具体的な景に結びつかない。三句目は一、二句目と違い素直に作られており、「耶蘇の谷」という地名も生きているように思われる。

題の「夢香山」は作品の中に出ていない言葉であり、解らなかつた。調べて、読み（むこうやま）と金沢の「卯辰山」の別称ということが解つた。地元の人にとっては常識的なことで、作者にも題名に対する思いがあるのだろうが、地元以外の読み手に対する配慮も欲しい。

新同人競詠作品全体を通して感じたのは、俳句に対する真摯な取り組み姿勢である。皆さんの今後の活躍に期待したい。

おいしい話

その⑧

【窓の緑】

高橋順子

私の家は路地の奥にあり、散歩の人が時々道に入ってくる。うちの自転車置き場をのぞき、「ああ行き止まりだ」と言って戻ってゆく。家の前に細長い花壇を作っているが、日当たりが悪いので、何か植えても花どきを過ぎると消滅してしまう。消滅しないのは茗荷と雪の下だけである。

家の周囲は塀で囲われているが、これは周囲の五軒の家の塀である。守るべきものがたくさんあるほうが塀を建てる。お隣の塀にくっつくようにして樺と山椒の木があつて、私の書斎の窓にいい具合に緑が映る。

山椒が芽吹いて、こまかい黄色つばい花をつけたころ、義弟がやって来て、「いまごろ葉っぱを摘み取って佃煮にするといいける、ちよつとしかでけへんけど」と言うので、一週間後に思い立って葉を摘み取り、煮てみたが、もう固くて佃煮にならなかった。

葉をしごいてみると、子どものころ茶摘みの手伝いをしたことを、新茶の香りとともに思い出した。私が茶畑に行くと、手拭いをかぶった祖母が「おや、新茶が来た」とほえんでくれた。

公益社団法人 俳人協会

俳句

5月号
予告

4月25日発売

予価(本体1,111円+税)

特別作品一池田澄子・大串章・石田郷子

追悼

金子兜太

▼座談会 安西篤×宇多喜代子×佐佐木幸綱

▼追悼エッセイ 深見けん二・宮坂静生・高野ムツオ・小林恭二・いとうせいこう・梯久美子ほか

▼兜太に捧げる追悼句 柿本多映・大牧広・鍵和田柚子・寺井谷子・片山由美子・正木ゆう子・小澤 實ほか

特別付録

金子兜太読本

▼句集評 金句集を網羅! 坪内稔典・対馬康子・小川軽舟ほか
▼俳論から見る人間・兜太 ▼年譜

付録

季寄せを兼ねた俳句手帖



電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA 0570-002-301(ナビダイヤル) <https://www.kadokawa.co.jp/>

南都秋色

岸川素粒子

采女祭光を惜しむ望の月
 南京に采女を偲ぶ月今宵
 閻魔寺秋の藪蚊のしたたかに
 面構崩さぬ邪鬼や秋さやか
 二月堂閉ざすや釣瓶落しの日
 磴荒れて萩枯れ急ぐ白毫寺
 千仏の壁絵かすかや鰯雲
 紅葉初む蔦の一縷や転害門
 如意輪も千手も埋れ秋桜
 鉄鉢に溢るる日差し奈良小春



猿沢池では仲秋の名月の宵に采女祭が行われる。采女とは古代宮中で主に食事に關する仕事をした女官で、地方から美人を集めたと言われる。中には帝の寵を得た者もいたらしく帝の心変りを恨んでこの池に身を投げたという話が残っている。池の西には小さな采女社があり、東には入水の際衣を掛けた柳の碑がある。名月の夜池に竜頭鵲首を浮かべ管弦の樂を奏し大花扇を浮かべるなどして采女の靈をなぐさめる。池には竜神が住むとの言い伝えもある。

井川deレストラン 宮崎みゆき

看板の著き年輪百千鳥
エリカ活く緑青浮ける銅の筒
春光や折紙の鶴箸置きに
草餅を作るエプロン揃ひたる
萵苣刻むしやしやしやしといふリズム
田楽は井川在来じやがたら薯
ちりめん雑魚腹凹ませて炊き上がる
母と子の分け合うてをり春菜寿司
香りたり春子のコロツケ揚がる時
ガレットの皿に添へたる花菜漬



「井川deレストラン」と銘打って、井川地域の在来種（昔からある種）の野菜を使った料理、また加工品でお持て成しをしようという試みをしました。

最近、新聞紙上やテレビ等で「在来」を取り上げています。作物の改良は進みどんどんおいしくなっていますが、井川では、昔からの種を大切に受け継いでいます。その味を改めて味わっていただきました。

今回は、春野菜ばかりなので、「また秋にも」と意気込んでいます。

祭馬 どうしていいか分からぬ眼

とこの祭なのだろう。馬に焦点をあてているので、田植を終えたあとの農村の祭を思わせる。以前は農耕馬として農作業を支えてきた労に對しての憩いの場が受け継がれているのであろう。

祭の朝、馬は少しおめかしをさせられた。色とりどりの飾りや紅白の手綱を付けて村人に曳かれてくる。田を渡る風になたてがみを靡かせながら歩く姿は勇壮にもみえるが、作者は「祭の馬」としないで「祭馬」と親しみをもって詠んだ。

神事のあとの馬は、祭を楽しんでいる大勢の視線の中にいる。主役であることも何もわからないまま、普段とは違う賑わいに落ち着かずとまとっているようである。その思いを大きな眼いっばいに溢れさせて。

上五に「祭馬」と季語がどしりと置かれ、中七から下五にかけて心情を伝えながら最後の一語で句は大きく展開する。そして「どうしていいか」でなく「どうしていいか」と打ち解けた表現で作者のあたたかい眼差しを添えている。

この句を最初は俳諧味があると思った。何度もみているうちにおかしみの中にほろ苦さを感じた。そして今は風景に故郷が重なって懐かしさが加わった。(榎本文代)

植ゑながら田水眩しと眩けり

句意明瞭で説明の必要がないように思われる。多分立夏後間もない頃の田植で、それまでの春のやわらかな陽光とは全く違う初夏の強い光が田水に反射して眩しかったのであろう。

ただ、この句、主人公が誰なのか、作者自身とみるか他人とみるか解釈が分かれよう。『奥の細道』の遊行柳の場面の「田一枚植ゑて立去る柳かな」の句と同じで主格が誰なのかで解釈、鑑賞が違ってくる(三つの解釈あり)。筆者は作者が日航勤務の時期の作品なので後者と考える。つまり、この句は田を植えている人とそれを近くで見ている作者との会話だろうと想像する。

近年、田植は田植機で行われるが、田植機が入らない田とか田の隅は人が植える。そういう仕事は専ら女性が担当するようだ。作者は通りがかりの畔からその農婦を見て「大麥ですなー 苦勞様です」と声を掛けた。すると「いえいえ、それより太陽が水に反射して眩しくて眩しくて」と眩きながら仕事を続けているのである。

作者にとっては初夏の田水の眩しさを改めて認識したということであろう。田植の句はいろいろあるが、田植時の日差しの強さ、田水の眩しさに着目した句は他になくユニークで秀逸と思う。(柳澤宗正)

黒川能をんなは土間でもの洗ふ

阿部月山子さんの家に泊めて貰い、黒川能に触れることが出来た。その中でも黙々と下を向いて働き詰めの女性の姿が目には焼き付いた。

平成六年作

(自註句集『小林愛子集』)

神への奉納の芸能・黒川能は、氏子により継承され、能座・能太夫・能役者・謡方などを世襲している男性が、二月一・二日夜を徹して演じる。

能座の大蠟燭の灯りから離れた厳寒の土間。沓脱ぎ石に履物を脱いで、板の間や畳に上がることもなく、黙々とものを洗う眼前の女が、淡然と詠われている。

家を中心とする血縁・地縁の因習の中で、耐えることに慣れた女。顔を上げず、下を向いて働く女は、前向き積極的に生きることを諦めているのであろうか。

「土間」「もの洗ふ」鄙びた生活の言葉が、リアルな重さで心に届く。

働きづめの女を哀れと眺める距離や情をはさまず、目に焼きついた女の姿が客観的に写しとられた。

「をんなは」と、読み手に呈示した「は」に、作者の深い思いがこめられているように思う。

(浅井敦子)

何草といはず新芽の皆美しと

この句は第二句集『辻楽師』の悪の華の項に収められた平成六年の作。「細見綾子先生」と前書がある。この時綾子先生は八十七歳、亡くなられる三年前である。この年は四月に第九句集「虹立つ」を上梓。六月に心不全で三ヶ月入院している。忍び寄る老いと病魔を感じておられたと思う。そんな頃、風発行人の庭を見て驚いたように「新芽が皆美しい」とおっしゃったのだと思う。その時作者は六十四歳。「風」に入会して十八年。すでに風賞を受賞し、句集『阿夫利』を上梓し、「風」の中心の一人として綾子先生のおそばに居られたのだろう。師の言葉に庭に目を遣る作者。名草もそうでない雑草も新芽が美しく輝きを放っている。二人のしつかりとした写生の目が、生命の輝きに感動しすべてを掬い取ろうとする目が重なり合う。作者も目を見張っていたに違いない。

平成六年の作に同じく「細見綾子先生」と前書がある句「娈娈と福知山音頭年忘れ」がある。また平成二十二年の句で「滝沢伊代次先生の申されし」と前書がある句「妻に逢ふも逢はぬも淋し鶏頭花」がある。作者の写生の目は人物にも絶えず注がれ、その俳句は人間性までも鮮やかに私達に見せてくれる。

(成瀬真紀子)

わたしの歳時記

祭

内 海 良 太

山揚げにまことの雲も道具立て 平畑静塔

この句から「山あげ祭」を知った。「山あげ祭」は大きな歳時記には収録されていない。

平成二十九年の那須烏山市が発行した「山あげ祭」



のポスターには
四百五十余年の
伝統・日本一の
移動式野外劇、
ユネスコ無形文
化遺産、国指定
重要無形民俗文
化財とある。

烏山では毎年七月末の八雲神社の祭礼に野外劇の「山あげ祭」が行われる。演劇の舞台は路上に設けられ、背景になる書割は、絢爛豪華な山の絵の張りぼてで「やま」と呼ばれる。この「やま」は烏山特産の和紙で色彩豊に作られている。この「やま」を立ち上げるので「山あげ」という。

炎天下の舞台では演目の「将門」や「戻り橋」など、重たそうな衣裳の花魁や二本差しの武士たちが常磐津の調べに乗って華麗に演じる。日中の公演が終わると舞台は畳まれ、次の夜の部公演の場所へ移動する。これが日本一の移動式野外劇といわれる所以である。

「わたしの歳時記」では、「祭」の季語を選んでみた。「祭」は夏の季語とされ大歳時記には「賀茂祭」を筆

頭に、固有名詞を冠した季語が数多くあるが「山あげ祭」は無かった。調べた末に『月別・祭り歳時記』（山田春生編 平成二十三年・紅書房刊）にやっと見付け出したので安心した。

山あげ祭山疊まれて夜の部へ	内海良太
花道は八千草の上綾子舞	小林愛子
晴ればれと雲立ち上がる祭かな	飛高隆夫
山頂の茅の輪をくぐる郵便夫	江見悦子
旅人にもてなしの酒浦まつり	福島せいぎ
腰低く舞ふ火祭の猿田彦	原田しずえ
満月へ弁慶の山車曳き回す	山田春生
外つ国の言葉行き交ふ雪まつり	松原智津子
この像は雪をんなかも目の翳り	岡本敬子
大漁を祝ふ巫女舞鱈まつり	阿部月山子
祭山車甚句の波の漂へり	佐藤雄二
袖脱ぎの女も担ぐ梵天祭	亀田やす子
火男が地べたで踊る村祭	増田幸子

宮入りへ神輿の道の夕映えて	中村千久
高千穂の闇へ打ち込む神楽太鼓	山本とく江
音も灯も匂も人も秋祭	沢辺たけし
祭太鼓打つ総身を波立たせ	吉中愛子
駅舎の灯川にこぼるる地藏盆	榎本文代
祭果て宵の明星消えゐたり	柳澤宗正
二十六夜祭男ばかりの厨かな	曾根 満
練神輿冬瓜のやうな股揃ふ	藤原千代子
山開き雲居の富士へ祝詞あげ	神田美穂子
山車を曳く昭和の顔の並びをり	成瀬真紀子
修二会へ馬酔木の闇を抜け行きぬ	井村和子
まあたらしき土俵の色や祭来る	中條睦子
深鍋に昆布巻煮る宵祭	谷渡末枝
花換ふる道化師赤き鼻つけて	山本麓潮
祭山車江戸の町名生きつづく	倉谷紫龍
祭笛町は昔の名にもどり	前田貴美子
椎の葉の祝女の冠にてんと虫	呉屋菜々

内海良太万象主宰第一句集

青嶺

四六判、一八四頁、クロス
背縫上製本、二五〇〇円
ISBN 978-4-946374-44-9

「万象」の方は二千元(送料)です
ご注文は 有 文 社まで
電話 042・475・0436

福田雅子 著

続芭蕉の栞

四六判、二三四頁、
上製本、二五〇〇円
ISBN 978-4-946374-47-0

「万象」の方は二千元(送料)です
ご注文は 有 文 社まで
電話 042・475・0436

自註現代俳句シリーズ12期②

小林愛子集

新書判、一五二頁、
二二〇〇円

「万象」の方は五百円(送料)です
ご注文は 小林愛子まで
横浜市旭区笹野台三一二六一二

最近の名句集を採る

安西 篤『素秋』

座談会
齋藤慎爾
今井肖子

上田信治『リボン』

堀切克洋

黄土眠兔『御意』

司会 筑紫磐井

※巻頭三句

鍵和田柚子

※俳句と短歌の10作録
樺末知子

千田一路

※好評連載
米川千嘉子

古賀雪江

※好評連載
下谷二助

河原地英武

※新刊情報
筑紫磐井

尾池和夫

※俳句情報
大牧 広

船越淑子

※本誌俳句手帳
すぐれ俳句連
神野紗希

※今月の筆

仲村青彦

※俳句の技法
問村俊一
の技研友録
二ノ宮 雄

高橋道子

一領百里

全国俳句大会

予選通過作品発表

俳句四季
Haiku Shiki

2018年5月号

4月20日発売
定価930円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

浜の一日 仲山秋岳

三溪園とその周辺を淡々と詠んだ連作である。十句中の三句に「寒日和」の季語の斡旋は、ベテランの作者の意図するところがあったのだろうか。

マスクして小さき花屋の主かな

町中の一風景を詠み余計なことをいっていない。「小さき」の具体的表現により、風邪をひいた主が一人で花屋を切り盛りする姿が目につく。

唐獅子の像にひらひら散紅葉

「ひらひら」とは紙片、木の葉など軽くて薄いものが風を受けてひるがえるさまと広辞苑にある。「散紅葉」は散り敷いている紅葉のこと。微妙に食い違う。

池の辺に咲きをる十月桜かな

春の桜と異なり十月桜は地味で床しい気がする。「咲きをる」は不要な言葉かとも思われるが、とことなく静かな佇まいを醸し出している。

参道を被ふ櫛の樹寒日和

参道を被っている櫛に木洩れ日はあまり期待できない。晴天に行く人の身が厳しい寒さに引き締まる。

公園に啼き交ふ鳥冬来る

何処にでもいる鳥の声に冬の到来を捉えた句。研ぎ澄まされた写生の句。

東照宮の秋 島野ひさ

ひささんは笑顔が印象深い人である。俳句仲間と気軽に旅を楽しんでおられる。今回の東照宮を訪ねる旅は肩肘張らない素直な詠み振りに好感を持つが固有名詞の多さが気になった。

湖かけて男体山に秋の虹

「湖かけて」の措辞によりスケールの大きい句となった。天候不順に振り回された旅と書かれているが、どのような自然条件であっても俳人にとっては素晴らしい材料となる。向き合う心を大切にしたい。

杉の実のどさと落ちたる登山口

強風に落ちたばかりの夥しい杉の実。青い葉も混じっていたことだろう。「どさと」が現場に立っている作者の実感である。

観音の在す湖畔や秋茜

中禅寺には勝道上人の作といわれている千手観音が祀られている。観音と秋茜の取り合せにより、湖畔のしっとりとした秋の趣を感じる。

修復の済みし三猿秋関くる

日光は冬を前に最後の華やきを見せる頃。東照宮の美しく蘇った三猿を詠んでいるが「修復の済みし」では報告の域を出ていない。三猿を観て感じたことを言葉にして欲しい。

同人作品評（三月号）

広瀬俊雄

雪払ふ腹話術者も人形も 大内和憲

腹話術師と人形との息のあつた話芸は楽しい。この句は会話だけでなく、雪を払う仕種にもそれを感じたのである。この術は、古代には呪術の神秘性を高めるために、中世においては、魔女狩りの対象になったという。

越冬の池へ種鯉抱き移す 森山暁湖

この句の種鯉とは錦鯉であろう。産地は新潟県の旧山古志村が中心である。一匹何百万円の鯉もいるとは想像しがたい。そんな大事な種鯉を越冬させるために、大事に抱き抱えたのだ。中越地震で大被害を受けた記憶が生々しい。

甘露煮の近江土産や年詰まる 大木茂

甘露煮を土産に買った。中身は、鯉か鮒か？鮒や諸子も想像される。近江土産というから琵琶湖産のそれらであろう。同時句を読むと、京都周辺を旅していることが窺える。

英字紙に花屋の包む冬薔薇 中村千久

花屋で薔薇を買った。誰に上げるのだろうかと余分なこと

も想像される。それを新聞紙に包んだのだ、しかも英字新聞に。花屋さんは英字新聞を購読しているのかと余計な推測。いまだき新聞紙に包むのも珍しい。

薬師如来拝してよりの薬喰 田中道江

くすり喰人に語るな鹿ヶ谷 蕪村

くすり喰いとは、むかし滋養強壮のために動物の肉を食べたことをいう。しかし当時は、獣肉を食することに罪悪感を抱いていた。蕪村の句の、「人に語るな」がそれだ。これを薬喰と呼び免罪符とした。薬師如来に一層の効き目を願ったのだろうか。

雁落つる遠州灘に棹のまま 古川京子

雁は晩秋に来て春には帰る。雁が飛ぶ姿は整然としているので、その形から雁の列とか雁の棹と呼ばれる。横一列もあるし、真ん中がくびれてV字となることもある。営巣地に遠い都会では滅多に見られない。この句は、雁の棹が遠州灘にそのまま落ちたと豪快に表現した

一平描く髭の漱石冬ぬくし 須賀允子

髭を生やした謹厳実直な漱石も、漫画家岡本一平の筆に描かれれば、穏やかな髭面となる。作者はそれに、俳諧味を感じたのである。なお「太陽の塔」で有名な岡本太郎は、一平と岡本かの子の息子である。

乾鮭や帳場格子の黒光り 三澤 治子

乾鮭は古代よりの保存食。新潟県村上市の乾鮭が有名である。市内の三面川へ遡上する鮭を捕らえ、内臓を抜き水洗いして陰干しにする。村上の街を歩き、軒先に吊された鮭にも、また帳場の格子にも黒光りを感じたのだろうか。

梟の啼くや開拓一戸減り 曾根 満

都市への人口の流入について、前号にも触れられていたが、この句も同じである。山村から若者がいなくなりやがて年寄もいなくなる。都市に住んでいると気が付かないが深刻な問題なのだ。開拓村からまた一戸が消えて、梟の啼く声がよく響き、それが一層淋しさを助長する。

コッヘルは久弥の遺品天高し 田村 愛子

作者は、展示されていた深田久弥のコッヘル(登山用の鍋)を見た。あちこちに凹みがあったかもしれない。それが久弥の偉業を偲ばせて、「天高し」と称えたのだろう。故郷の加賀市に「深田久弥・山の文化館」があり、久弥ゆかりの様々なものが集められているという。久弥は初め売れない文士であったが、名著「日本百名山」で一躍有名になり、登山ブームを巻き起こした。山梨県の茅ヶ岳が終焉の地となった。

白鳥の飛翔かがやく欣一忌 井村 和子

白鳥といえば沢木欣一先生の「八雲わけ大白鳥」の行方かなが思い出される。十一月五日の欣一忌に、まさしく、そのような荘厳な光景を見て感激したのだろう。私は瓢湖で見たのだが、この飛翔を見たのは何処なのだろう。

許六画く百の襖絵冬の寺 山本 麓潮

森川許六は彦根藩士の子として生まれた。若い頃から漢詩を良くし、絵は、狩野探幽の弟で奥絵師の狩野安信に学んだ。江戸に下向したおり宝井其角の指導を受け、後に蕉門十哲となる。彦根の龍潭寺にある襖絵は許六が描いたと伝わる。

包丁を槌で打ちこみ鯽さばく 福島 吉美

なんとも勇ましい情景である。よほど大きな鯽なのであろう。単に包丁だけでは切れないとみて、槌を持ち出し、それを叩いて打ち込んだという。頭を伐り落とす時か、身を三枚に下ろす時だろうか、いろいろな想像される。

寒紅濃く人工知能を語りけり 前田 貴美子

いま人工知能(AI)が話題となっている。身近な例では、将棋や囲碁などの一流棋士がAIに負けた事だろう。このまま進歩を続けると、やがて人間を超えて、人間に反乱する危険もあるだろうか、若い女性が熱く語っている。寒紅と人工知能の取合わせが面白い。

し 起 鯉

竹澤竹里 (酒々井)



炉開きは亥の日亥の月亥の子餅
金北山照らして居りぬ冬満月
海荒ぶ夜の日本海ずわい漁
越前蟹無口になりぬ酒の宴
有磯海覆ふ黒雲鯉起し
波の花舞ひ飛ぶ荒磯能登の海
越後海空一面の冬銀河
灯油売り綿虫連れてやつてくる

雪 解 風

島田和枝(佐野)



瞑想の羅漢にしきり雪霰
茅葺の廻廊長し雪解風
風すこし薄氷の寄る池畔かな
池尻の角組む蘆につまづきぬ
雪解光那須連山の襞深し
遊行柳畔にはりつく犬ふぐり
早春や遊行柳へ風やはら
雪どけの朱の橋渡る雲巖寺

万象ノオト

テーマ

「船」



沓岐の花婿

福岡 高山ひさ子

同居している三女の花婿の実家は長崎県の沓岐である。結婚が決まり十三年前長女の家族と共に沓岐へ御挨拶に行った。博多港からフェリーで二時間二十分、夏休み中で船は満員、身動きできない程。出迎えてくれた婿のお父様が島中を案内して下さった。海の幸たっぷりの御馳走、長女の幼い子供達は海水浴やイルカと遊んで大喜び。二泊して帰りは指定席でぐっすり。

婿の実家は農家なので、盆正月、田植、稲刈、草刈と年に数回娘達は帰省。初めの頃は船酔いしていた娘も最近は慣れて船旅を楽しんでいる。台風で欠航して予定が変わったりと、船が交通

手段の島は天候の影響を受け大変だが、エメラルドグリーンの中原を真白な波を立てて進む船旅はなかなか味わい深いものである。

船に魅せられた弟

鎌倉 佐藤千晴

船のラインの美しさは、芸術的です。これは、定年退職した後、小さな工房を構え、船大工として三百六十五日、木工でシーカヤック・ヨット等を作り続けるロマンの男、弟の話でございます。その頃はまだ田舎だった海の近くに住み、現在に至っております。塗装が終わると試乗は江の島沖、又は三浦半島の方で行うようです。

環境は人を作るとは良く云ったものです。年子で生まれた長男長女は小学生からヨットクラブに入り、長女は現在、二〇二〇年のオリンピック用に、全世界の選手のヨットを一手に引き受ける会社で奮闘しております。

第二の人生が終わるまでに、自作のヨットで日本列島を縦走したいという

弟。奥さんに申しました。「寄港地ごとに迎えに来てね」と。

ボートを買う

札幌 横山康博

船には色々な思い出がある。

その一つに高校の修学旅行があり、昔は今のよう飛行機を使っていた修学旅行など考えられず、北海道と内地を結ぶ唯一の交通手段は船だった。

色とりどりの紙テープが飛び交う中、船は函館から青森へと向かう。紺碧の海を波を掻き分け進む船は幻想的であり、いつまで見ても飽きなかった。しかし、この青函連絡船にはもう一つ思い出がある。昭和29年9月26日台風15号、俗に言う洞爺丸台風、日本最大の大難事事故だ。実はこの船には祖母が乗る予定で、函館へ向かったが汽車が遅れ乗れなかった。私が四歳の時であるが、運命とは思えないものである。そして今、私は「船と海好き」が昂じてボートを買ひ、釣りを楽しんでいる。但し私は全く泳ぐ事はできない。

女性が主役

東京 久留島規子

十年程前、夫の仕事の取引先の船会社から長崎の造船所で行われる新造船の命名引渡式に招待された。必ず夫人同伴で、と念を押された訳も解らず、初体験に心躍らせて長崎へ向かった。

どんちゃん騒ぎの前夜祭から一夜明けて、町の人々や楽隊に賑々しく迎えられて造船所へ。肅々と式は進行し、いよいよ私の出番となった。銀色に輝く斧で、支綱切断の大役である。縁起を担ぐ船の門出に失敗は許されない。この支綱切断の役目は、女性に限られるそう、謂わば主役を無事に務めた私は、誰よりも丁重に持て成された。

船は鉄鋼のスラブの運搬船「斑鳩」。数か月後、太平洋の処女航海を終えた「斑鳩」をロングビーチ港に迎えた

大船に乗る

四街道 釋 勝信

ときに「大船に乗っているよう」と

言うことがあります。信頼できる基盤を得て、すっかり安心できる状態になることの譬えであることはご承知のことでありましょう。

さて仏教、浄土真宗の開祖であります親鸞聖人は、主著『教行信証』の冒頭で「難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり」と言っています。

簡単に意識しますと、苦しみの波の絶えない人生の海を明るく渡す大船があり、その船に乗ることですよ、ということになります。そして、その大船とは「阿弥陀仏の誓願」であり、乗るとはその「誓願を知り、受け容れること」でありますから、つまりそれが浄土仏教における「大船に乗る」ということであると思います。

長瀬の秋

横浜 長野高朋

昨年の秋、埼玉県の長瀬に秋の一日を楽しんだ。長瀬はライン下りと、秋の七寺七草巡りで知られている。

午前中に七寺七草巡りを終え、いよいよ「長瀬ライン下り」だ。

船の長さ十メートル、定員二十名。六キロメートル、四十五分の行程を船先で竿一本で舵を執るベテランの船頭と、艫で船を漕ぐ若者に命を預ける。瀬をゆつたり下り、しぶきに濡れる急流に差し掛かった時、船先の船頭が岩に竿を取られた。竿はぼーんと空中に舞い上がった。私は「ああ神様」と心の中で叫んでいた。ここですいに最期か。ところが何と、艫の若い船頭が舞い上がったその竿を見事にキャッチし、何食わぬ顔でベテランの船頭に返していた。

長瀬の秋は期待通りであった。

「万象ノオト」投稿募集

▽9月号「家族」(5月末日締切)

▽10月号「神様」(6月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒168-0071 東京都杉並区高井戸西

2-18-1-1107 久留島規子

栃木

司馬遼太郎と佐野

栃木県佐野市は、二十二歳の青年将校司馬遼太郎（本名福田定一）が敗戦を迎えた地である。

遼太郎は昭和十八年大阪外語大から学徒出陣して旧満州の陸軍戦車学校に配属された。やがて戦況の悪化により本土防衛の決戦部隊として兵士八六六名、戦車七十七輛と共に昭和二十年四月佐野の地を踏んだ。市内の七つの国民学校（現小学校）に分散され、遼太郎の所属する第五中隊は植野国民学校の校舎の一部を兵舎とした。

「敗戦の数か月前私共がいた兵舎は小学校の一部で最初の仕事は、敵の空襲に備えて戦車を隠すために付近の山に穴を掘ることと、校庭に対空機関銃座のための穴を掘ることだった。その作業中しきりに謡曲の「鉢の木」を思った。

私は戦略のため毎日のように町を歩いた。どの家もどの辻も手入れがとどいていて、軒下で遊ぶ子らもまこと子柄がよく、自分がこの子らのために死ぬのなら多少の



将校記念撮影（植野国民学校にて）

意味があると思った。だが或る日おそろしいことに気づいた。このあたりが戦場になれば先ず死ぬのは兵士よりこの子供達だからだ。」（『いの国のかたち』一）文芸春秋

学校の用務員室には教師や将校達が兵役の合間によく訪れていて、その中には遼太郎の姿もあった。新聞を読んだり時には子供達に歴史の話をよくし、佐野の方言にも興味を示されたという。宿舎の近くに機業を営む山士^{やまし}家を遼太郎は兵役の合間によく訪ねては主人の宗次氏と人生を語り合い、時に漢詩を共によくしたという。

遼太郎が直木賞を受賞した際、山士家の二女である駒形菊江さんがお祝いの書状を差し上げたところ「なつかしいお手紙ありがとうございます。」に始まる丁寧な礼状に漢詩が添えられてあったという。

遠き火明りのゆらめき

石頭の冬 釜山の春 佐野の夏

風霜積り来し二十余歳

相顧みて白髪に驚く

そして古きよき日本人に触れた思い、このあたりが死の野となると思いつつ最後の語らいをもとめたのが山士家の人々である——。一日一日が死と向い合った一九四五年度の佐野の夏が司馬文学の原点であると述べられてあった。

参考文献・写真 早乙女務著『あの夏の日の司馬遼太郎』

（加藤季代）

俳書探訪

山本とく江

俳誌「百鳥」平成三〇年三月号 主宰 大串 章



平成六年四月、大串章が千葉で創刊。師系大野林火俳句により、まだ見ぬ新しい自分を発見すべく研鑽を積む。

美しい城として名高いドイツ・ノイシュヴァンシュ

タイン城を表紙に、百四十頁の重厚さ、読み応えがある。

主宰作品 白鳥より 大串 章

初旅の山河に思ひ新たにす

白鳥の帰る日語り合ふごとく

成人の日の居酒屋に老い独り

俳人協会会長に就任された主宰の心情が窺われる作品。

鳳声集(一)―自選―より

雪礫投げて土着のこころざし 太田土男

踏み出せる喜寿の一步や冬木の芽 甲斐遊系

枇杷咲くや欠航多き離島便 松田雄姿

鳳声集(二)より

山眠る山家に明かり点りけり 相川常子

海鳴りや画家逗留の間の火鉢 安宅弘子
朝刊を斜め読みして十二月 安達輝美
冬さうび空輪の枢迎へけり 荒木民子

どの句も写生の奥に自身の感動が活写されている。

短詩燦々・季節の色鉛筆(卒業) 清水哲男が(なんとよく泣くよ今年の卒業子)を挙げ、軽妙な筆致で興味深い。

百鳥作品評(一月号) 阪西敦子(卒業)が鋭く暖かい眼差しで鑑賞。自句のほたり(連載) 郷田健郎、佐藤京子の自句自解。

鳳声賞受賞者論は三名各々に若林杜紀子、太田土男、山本三樹夫が担当。百鳥賞受賞者論は比田誠子が担当している。

次に野々村紫句集『楡の東風』特集、総論を太田土男、作品鑑賞を生出紅南等八名で書いている。

作家・作品研究シリーズは柏原眠雨小論(三)「哲学者にして俳人」と題し、高宮義治が健筆を揮っている。

2か月競詠では、北川玉樹、中島瑞枝の作品を石崎宏子が鑑賞しており、現代俳句月評を毛利晴美。今月の本棚では、

樺未知子句集『カムイ』を北川玉樹が鑑賞されている。更に探鳥(俳句評)欄、飛鳥集(課題)と続く。

「百鳥」は視野が広く、紙面が充実しており、俳句の可能性・新しさを発見するために研鑽を積んでいる情熱に感銘する。

また競詠、題詠、書評、作品論など研鑽の場が多く、生き生きと切磋琢磨されており、大いに勉強になった。

(筆者住所 〒277-0005 柏市柏一七―二〇〇六)

しら梅や北野、茶店にすまひ取 燕村 (安永七年)

福田 雅子

山下一海氏の著書に「白の詩人―燕村新論」がある。

燕村については、一般に郷愁の詩人とか、炉辺の詩人、籠居の詩人などの呼称が付され、それぞれ納得のいく要素もあるが、一海氏は敢えて白の詩人と呼びたいと言われる。

例えば次の句を取り上げて考えてみよう。

白梅や墨芳しき鴻鵠館 燕村

〈鴻鵠館〉の〈鵠〉の字は臚が正しく、館の意は館に同じ。

平安時代、筑紫(福岡)、難波(大阪)、平安京(京都)に置かれた外国使節接待のための宿舎である。

梅が綻び始めた。いよいよ春の訪れである。この心弾む季節の到来と共に、大陸から一級の文化人を中心とする使節団が続々とやって来た。折から梅は満開の様。鴻鵠館では、国内、国外を問わず、多くの文化人が参集。詩歌の応酬が始まる。唐墨の香しい匂いに、庭の白梅の香りも漂って来て、何とも言いようのない典雅な空間がそこにある。季語は勿論白梅。因に芭蕉について付言するなら、彼には梅の句はあるが白梅(しら梅、白梅)はない。芭蕉と燕村の相違については、時代の推移、また個人の好尚もあろう。

枕草子「三七」では、「木の花は こきもうすきも紅梅」と紅梅を絶賛している。源氏物語にも「紅梅」の巻がある。

和歌では、梅の香は昔を想起する縁となる。例えば「徒然草」では次のように綴る。

「梅が、や見ぬ世の人に御意を得る

ひとり灯のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とする。

梅の匂ひにぞ、古の事を立ちかへり恋しう思ひ出される」との発想となる。さて、それが芭蕉の登場ともなると、場面はぱっと転換する。奇想天外の成行。ユニークな取合わせ

むめがかにのつと日の出る山路かな 芭蕉

今や昔の思い出ではない。梅の香に誘引されたのは、山路を辿る人に、だしぬけに「のつと」現れた日の出だった。

古典や伝承の世界から瞬化して飛び出た芭蕉俳諧の妙。さてこの稿の主人公燕村は白の迫力で登場してくる。

白梅や鶴装を着てうた、歩す 燕村(几童句稿)

〈鶴装〉は白楽天の詩「雪ハ鷺毛ニ似て飛んで散乱す 人は鶴装を被テ立ツテ徘徊ス」(和漢朗詠集) に依拠する。

白楽天の詩にある雪を白梅に、徘徊スを柔らかにうた、歩すと表現して、燕村独特の世界を展開した。

表題とした「しら梅」は様相の魅力だけではない。最初に挙げた一海氏の鑑賞を借りよう。北野天満宮は白梅の梅林で名高く、七軒茶屋も知られている。そこに大きな体軀の相撲取が立ち寄って床几に腰を下ろし、のんびりと茶などを飲んでいる様子。確かに茶屋の緋毛氈、白梅、たくましい相撲取、この三者の取り合わせの効果が生き生きとした秀句である。拙稿を綴りつゝ、観梅の旅に出たいとしきりに思った。

吉野美智子（静岡）

巻頭作家（四月号）プロフィール



吉野美智子さんは昭和十三年神奈川
県横須賀市生れ、昭和二十一年両親の
故郷静岡県掛川市に転居、市内の高校
卒業後中部電力に勤務の後、結婚を機
に静岡市に住み現在に至る。その後地
元の企業に就職二十年間勤務した。退
職後はご主人のご両親を送られた後ま
ず水墨画を始められ、その後平成七年
浅場芳子先生が公民館で立ち上げられ
た安倍川句会に入会。やがて会員の減
少により青葉句会に合併され、今日ま
で幹事として皆から信頼されている。
その間病氣療養中の句友のもとを度々
訪れ「季節風」を届け励まし続け、な
んと十年ぶりに句会に復帰するという
事もありました。細やかな心遣いので

きる真面目な吉野さんの今回の巻頭は
句会の皆の待ち焦がれていたことでし
た。

歴史と旅好きだったご主人と日本中
よく旅に出られた。しかもツアーでは
なくご主人オリジナルの旅であつたと
か。その中でも東日本大震災の一年月
前に訪れた松島と、平成二十三年桜時
の国宝彦根城がとても印象に残ってい
ると振り返る。この旅を最後にご主人
は入院された。

ひと匙に夫のうましと寒の水
凍つる夜や夫の目尻の涙あと
病む夫に三年日記頼まるる
献身的な看護むなしく十二月ご主人
は旅立たれた。どの句も実感があり、
素直な気持ちを淡々と詠まれている。ご
主人の入院を機に十五年続けた水墨画
は止められたが俳句は続けた。句友
と吟行に積極的に出かけ、俳句を楽し
み生きる糧になっているとか。

故郷のJR掛川駅は木造の駅舎。一

時建て替え案が出たが、市民の熱意に
より現在も木造駅舎のままである。

三番子翔つふるさとの木の駅舎

九十三歳で母様が亡くなる迄度々
尋ねられこの駅舎を詠まれた。

昨年は年間入選句数が三十六句、そ
のうち四句が二回、飛高先生の「万象
作品の佳句」にも選ばれている。

明け方の街の眠りを囁れり

蟬百の声に踏んばる一樹かな

一句目は「眠りを」という表現（眠
っているその時間を、という程の意味）
がよい。二句目は堂堂とした大樹の蟬
時雨を見事に描き上げている。と評さ
れています。

浅場画先生のご指導の中から、英彦
先生の「言葉が生過ぎる。俳句は詩、
色々の表現を探しなさい」、芳子先生の
「音楽、絵画等様々な文化芸術に触れる
ことが俳句の糧になる」が心に残って
いるという。

（神田美穂子）

万象作品

飛
高
隆
夫
選



仁王像見比べて子の初詣町田桔梗 純

寒念仏踏切に列途切れたり

師の忌とて思はぬ出合ひ寒紅梅

月蝕を見てゐて大きくさめかな

辻に置く賽銭十九の厄落し土浦澤 照枝

火の先へ後へ急かるる畦火守

昼近く野焼の風の散らばれり

風に乗る風遠まきに鳶舞へり

葺替へし茅勾ひ来る多摩郡所沢南雲秀子

春しぐれ同じ名並ぶ山の墓

冬落暉はるかに著き秩父の嶺

雪降るやメール残して妹逝けり

高きより鳶の御慶や三龜山佐野茂木弘子

新雪に轍一本朝刊来

寒垢離を終へし女人の束ね髪

月蝕や凍星さらに凍りたる

竹林の奥に灯りし寒椿船橋宮本加津代

露の臺一つに心ほぐれけり

青空となりて雪野の広さあり

風切羽の瑠璃鮮やかに残る鴨

雲水の笠に風花舞ひ込みぬ静岡岩崎武士

鷹匠の皮手袋に獲物の血

牡丹鍋つつき山売る話など

流木に朱の脚並ぶ百合鷗

残照の雑木の梢冬三日月

日野喜多尾明子

両脇に雪積み上げて月の道

吹雪かれて聖橋より地下鉄へ

冬ぼたん清なるまま崩れけり

朝の日に七色放つ屋根の霜

静岡吉野美智子

裸木の枝に爪立つ鷺の脚

炉話に熊の剥製立ち上がる

山々へ目覚めの煙火初不動

梵鐘のかたく響けり寒の朝

佐野黒川しげ子

寒明けの風を聴きをり国府跡

新雪の畑より鴉低く翔つ

娑羅の芽のしろがね色や二月来る

防火デー古利目がけて寒の水

松戸石川幸子

やんはりと銀紙焦げて芋焼くる

春浅しまたポケットに手を戻し

真夜中のガラス戸に来る春一番

札幌勝木享子

銀鱗の鰓かがよふ群来の陸

山凍る皆既月蝕血の朱に

はるにれの緩びし秀つ枝春の空

北浦詩子

日の翳り空地に深き雪をくぼ

確かなる空の青さや春隣

ダイヤモンドダスト白毫相仰ぐ

札幌佐々木茂

薬喰ひ小児結核病みし日々

白晝の寒満月や蝕終る

ごつごつと凍つる滝より水の音

椋鳥が飛ばす紅き実雪染めし

横山康博

公魚の釣り穴のぞくやせ狐

波の花願懸岩を駆け上がり

赤銅の皆既月食寒夜かな

吉田克己

鍊群来にしん御殿に灯再び

三十三才鳴いて小枝の揺れ止まず

東根門脇好子

獅子舞の小刻みに揺れ尻尾かな

虎落笛荒波寄する竜飛崎

新潟榊原キヨ子

特売の野菜売り切れ雪しんしん

路地裏へ逃げ込む猫や雪しまき

遠弥彦墨絵のやうな雪景色

佐藤幸示

亡き妻に挨拶をして年新た

文字の浮く妻の位牌や初明り

初茜黄金に変はる街の家

高野松風

降る雪や盛り塩尖る玻璃の内

びつしりと丈そろひたる氷柱かな
雲間洩る冬の夕焼五頭山に

新潟

中塚滋子

白鳥の鳴き合ひてゆく薄曇り

消防車待機させてのどんどの火

大鳥居木遣のひびく節分会

宇都宮

安久都 登

アメ横に初売手締めシャンシャンと

母の味娘一家へしもつかれ

風花や次の指示待つ警察犬

福田 弘

前髪を搔上げ搔上げ受験の子

梅一輪活けて東司の仄明り

旅の間に跡形もなし実千両

芳賀

福武幸子

鍵穴にてこずる指の悴みて

園に来て保母に着ぶくれ脱がさる

着ぶくれて皆既月食見る親子

稲川清子

真つ赤なる鬼面の父に鬼は外

軒下の日差し集めてクロッカス

爺婆に切干し匂ふ日和かな

埴 テル

小鳥群れ餌となりたる冬菜畑

寒卵二十個添へて見舞かな

坐禅組む寒暄の気を丹田に

益子

光岡れい子

梅が香や猫に轆轤座奪はるる

枯芙蓉切りたる庭の広さかな
月淡く山むらさきやお元日

鹿沼

渡辺利子

風止みて鶏日暮るる里の山

絵襖の里山遠くかすみけり

渡辺利子

高らかに鳥鳴く里の淑気かな

白男体山幼背負ひて若菜摘む

薄氷の沼に耀ふ夕日かな

栃木

飯塚キミ

沼べりに鴨ぼつぽつと夕さりぬ

凍て風の吹き抜く小檜林かな

高々と五色の放水出初式

佐野

飯塚満里子

電飾の「青の洞窟」星寒し

富士山見ゆと車内放送初御空

しづり雪灯籠の苔ふくらめり

売野 緑

美術館玻璃戸にすつきり冬木立

今開きさう葉囲ひの寒牡丹

梅一輪骨董市で蛇買へり

大川政子

初雪や木々鮮らしき今朝の庭

風花舞ふ女子マラソンにエールかな

意気込みはパパが一番歌留多取り

金子恵子

初詣礼儀正しく部活の子

寒夕焼飛行機雲の幾筋も

福豆を強く撒きたる八十路かな

齋藤ミチ子

藁苞に一灯吊す寒牡丹

笹鳴きに歩を弛めたり三龜山

三龜嶺の櫓の冬芽の浅葱色

佐野

関口かつ子

限笹の群れてしづかや冬日さす

初日待つだんだん頬の紅潮す

初電車幼馴染と出逢ひけり

高田貴子

雪虫殖ゆ雨情の宿の木の露台

大寒の皆既月食見届けぬ

水音の一縷を奥に滝氷柱

島田和枝

映画果て雪降る街を歩きたり

雪原を一直線の兎かな

近づけば淡き色なす冬桜

店網洋子

静かなる月の輝き除夜の鐘

寒晴やつぎつき開くパラシユート

蠟梅や織姫山へ七曲り

永澤千代子

冬桜古刹を守る仁王像

読経する日蓮寺に寒椿

水鳥のつぎつき陸の日だまりへ

仲山さよ子

風花や山一つ越え野辺送り

木道のそちこちにまだ根雪かな

冬の日を一緒に仕舞ふ客布団

菰原美穂子

城跡の山茶花空に紅をおく

見渡せるすべて地上は冬の鶴

神棚に齒朶あをあとと注連かざる

佐野

久田洋康

閑けさや窓にさし入る初明り

札とばし身のはづみたる歌留多とり

紅殻の格子くぐりて京の冷え

松田富夫

冬銀河見上ぐる夫婦寡黙なり

座敷井の寒水汲みて酒仕込む

母の忌や武蔵野に雪降りしきる

川越

岡野輝子

梅三分日だまりに在す六地藏

節太き農夫の指や日脚伸ぶ

鬼も内と豆撒く里の杜かな

鈴木アキエ

園児等の散歩の土手の春めけり

這ひ登るつたの葉青き冬木かな

境内に鳥の樂園青木の実

常見イツ子

鬼やらひして一人居の福を待つ

限りなく雪富士近し深呼吸

照明の暗き門灯春浅し

山下とし子

立春やたまりし薬みな捨てて

雪だるま目玉残してとけにけり

水底の赤き巻芽や春きざす

山本敦子

鳩つがひ昨夜の福豆拾ひをり

日の透きし臘梅の香や路地に充つ

五箇山に灯る千灯雪しんしん 坂戸 守山勝江

校庭に青きパイパイヤ島二月

春めける波打際に砂鳴らす

のどけしや茶菓子ほんのりさくら色 千葉 大月玲子

防波堤春の潮のふくれ来る

永き日や仕舞ひ忘れの道具箱

雪原を真一文字の列車かな 松浦陵保

初旅や父娘で巡る港町

夜行バス待合室の福寿草 酒々井 小林あけみ

夕暮の田に白鳥のほの明り

鳥去りて枯葉の落つる日向かな

釣堀に休日ありて冬たんぽぽ 小林あけみ

風花や水車の軋む足湯小屋

今朝の春流るるやうに鳥の影 小林あけみ

初稽古床滑りゆくトウシューズ 中嶋久登

子規球場外野一面霜柱

日の届く底に動かぬ冬の鯉

朝日受け川霧覆ふ冬田かな 佐倉 新谷八郎

新年のエイサー激し平和来よ

鶴や朝日を返す霜の屋根

春耕の土の硬さや歟踊る 竹内実

初午や供ふおこはの豆の艶

枝先の雪の中に春動く

落のたう土留丸太に並び出る

縁側の老婆傾く日向ぼこ 佐倉 立原千代子

廃屋の庭にほつこり福寿草

暁の梅一輪のかぐはしき

身の内に鬼を隠して豆を撒く 横川良子

菰卷の解きためらふ遅き春

仲見世の賑はひを抜け針供養

島人の宝の一つ冬銀河 四街道 塗木翠雲

山原の森に明るき寒の雨

寒の雨御嶽大岩洗ひけり

乾きたる音を掃き寄せ落葉焚 船橋 内田節子

白菜のよき齒応へも母の味

残されし鳥の巣一つ冬の月 近藤澄子

極月の日溜まりにゐる嬉しさよ

枯葉踏む音楽しめる雑木林

水仙の白きに襟を正したり 柏 村田由美子

雪の花睫毛に軽き重さかな

白梅や筆塚あたりまだ蕾

早春や陽のとどまれる石切場 松戸 菊岡緋路

白壁に裸木の影移りけり

枯草や保護色の猫耳動く

朝鳥の明るき声や実南天

杖はねて池の氷の厚さかな

松戸

野田成夫

図書館の同じ席占め冬帽子

流水のきしむ音きく港かな

すきとほる空に風花色を持つ

市川

奥澤よし江

道のべの清水がひかる西行忌

不知火の海の底まで春日さす

たちまちに川の消えゆく吹雪かな

東京

石井登女

初霞して対岸の船だまり

遠山の近くて青き三日かな

深霜や明けの草木の煌めきて

七草のコロッケ食みて夫笑ふ

靖國の振舞酒や初詣

雪折れの桜古木の匂ひたり

辻に立つ尼僧の小さき嚏かな

大楠の芽吹きや師の忌近づきぬ

夕波に鯨の尻尾沈みけり

本陣にともる提灯冬ざくら

北条一門自刃の墓や冬すみれ

崖の星またたき磨く野水仙

合体ロボ並べし吾子の獺祭

春隣予後の余生にやや自信

下嶽孝一

小池宗彦

草間三香子

岡村純子

如月の音無き湖や昼の月

東京

杉浦一子

凍つる夜や猫にも在りし夜叉の貌

雪煙上げて竹林雪払ふ

春立つや今日の句会に新人も

水温む腕まくりして厨妻

潮騒を遠くに聞くや春に入る

日向ぼこ夫の長椅子軋みたる

子等の声聞こえぬ路地の寒さかな

のら猫の眼の光寒の内

走り根に雀のまるぶ冬の朝

立春や朝一番の深呼吸吸

潮風の道水仙の道辿りゆく

立春や遊覧船の白き水脈

軒氷柱万華の光宿りけり

飴切りの響く参道梅一枝

啓蟄や迷路のやうな渋谷駅

飛石に猫の足跡春の泥

閉ぢ籠もる二十センチの春の雪

をんどりに蹴られし事も寒卵

春隣幼なに付くる迷子ひも

隠沼の水泡うき立つ寒の明

春灯射的の的はドラえもん

鈴木光正

田崎京子

田中明子

徳竹良子

中澤桃子

長谷川信也

長谷川はるみ

衛兵の瞬きもせず春日日向

燃えつきし大提灯や春の暮

雪の轍鳶轢きしまま凍てつけり 東京東 順子

アオサギ降り来て雪積むを見上ぐる

先に家なきか雪の掻かれぬ石の段

エッフェル塔胸元までも冬の霧 平子 甲奈

冬の雨溢れセーヌの舗道消ゆ

雪嶺や日向と蔭のハーモニ

空凍つる赤銅色の皆既蝕 福田 ふみ子

鴛替の列それぞれのかな

翡翠の翔び立つを待つ冬日向

街中の音の吸はれて雪深し 本多 葵

寒月の枝にかかりて吹かれをり

天狼の青き瞳の明滅す

海光をとどめし水仙活けにけり 松本 幸男

集まりてインコも家族福寿草

山眠る湯は渾渾と露天風呂

福寿草顔出す土のゆるびかな 日野 渡辺八枝子

枯芝のにはひ立ちたり春の雨

梅の花めじろの目玉こぼしけり

大寒の釣人のひざ猫ねむる 町田 井上篤子

工事場の赤灯にじむ吹雪かな

青竹のかをる手水や一の午

さざ波の縞目に残り薄氷 横浜 阿部トキ

稲荷祭祠に太き目刺吊り

白梅の満ちてかくせり石灯籠

枝の雪一夜にしづる大櫓 大久保 義和

大寒の道路工事を覗く子等

青空に日射し眩しく寒明くる

青天をとんび飛び交ふ淑気かな 大駒 泰子

風邪籠籠のやうに起き上がる

大寒や人の震へる噴火あり

真青なる空の眩しや梅二月 岡 元枝

如月の煌めく日差し竹の葉に

月蝕の寒空仰ぐ幾度も

枯野道夕日に親子の影長し 岡田 幸吉

あは雪や砂丘の紋のなりに降り

雪霏々と信号灯の赤散らし

爪立ちて結ぶみくじや初雀 後藤 晴子

菜の花のどつと迫れり海真青

病める子に母の足音春障子

三代の襲名果てて雪の街 坂本 具子

寒晴の空に尾長の青横切る

田の水の幽かな流れ梅三分

狛犬の形のまゝに雪積る 横浜 三木豊子

開け放つ仏間のほこり寒明くる

マスクしてマスクの人と遠会釈

当分は五千歩試す寒の入り 豊美佐子

句作りの歩み小さく日脚伸ぶ

寒林や真青な空を抱へ込む

こもり居の日を重ねつつ日脚伸ぶ 若林昌子

水餅の大瓶厨の暗がり

電線の揺れに外面の寒さ見ゆ

赤銅の皆既月食着ぶくれて 茅ヶ崎 久保田富士子

野面積のあはひに董はした色

青空へ香をたつぷりと蠟梅花 伊勢原 長嶋和子

元旦もA定食や研修医

緩やかな父の時間や去年今年

丹沢の名水で打つ晦日蕎麦 山本カツ子

初日差す岬の松へ絵馬あまた

蒲団干す急に帰ると言ふ電話

輪郭を残し寒夜の月欠くる 秋山憲三

鉢巻きし畝一列の白菜畑 桑野

葉束を被せ苗床あたためる

尾根の木木日に赤らむ冬芽かな 佐藤嘉洋

春めける山の湖畔に投句箱

寒満月欠けて赤銅色ほのか

恵方道富士を捉へし道路鏡 松田 古谷悠紀子

月食の闇の迫りて冬オリオン

こんなにも食べねばならぬ年の豆

半島の果まで三浦大根畑 小田原 河野貞夫

たんばの好きな羊の口せはし

二重三重淡くもつる春の雲 大寺 江口嘉郎

大寺の暗き間道寒椿 甲府

朝靄の静寂の濠の鴨の声

軒氷柱光の粒を落としけり 静岡 石川裕子

重ね着の数比べ合ふ齢かな

蠟梅の光賜る不動道

子を叱るいつもの声や福は内 興津千鶴子

盆梅の一夜を待ちて逝きにけり

赤き実に黒の兆しや寒の明

探梅や石灯籠の苔厚き 繁田たけ子

風にのり走る白波寒明くる

砂浜に百の足跡春立てり

春の鳶輪をかく羽根の光りたり 杉山 明

紅葉散る稲荷となりし武家屋敷

暁をライオン吼ゆる大寒波

どんど焼富士向く達磨点火待つ
予科練生の凜と立つ像寒桜
切絵展の髭の細やか室の花
燈台へ波が波追ふ水仙花
鯛焼の目玉ひんむく寒さかな
交差点マスクの波の動き出す
しゆるしゆると紐を飛び出す喧嘩独楽
風花の一日遊ぶよ山の宿
冬深し百一歳を全うす
峽の日を集めふつくら茶の咲けり
二ヶ月の風の音聞き厨ごと
裸木やぐいと拳を伸ばしをり
木洩れ日にひつそりと咲く冬葵
臥す人の眼差しの先冬の月
裸木を風除けにして爺二人
漆黒を裂き三日月の冴ゆるかな
大仏の裾に櫓組む寒きのこ
恵方より猫の歩みのゆつくりと
注連飾鬼の子葉に縋りをり
夕暮の空を濃くする白椿
帆船の風待つ入江掛大根
冬菜畑威しに吊らる疑似鴉

高橋一夫

内藤允昭

新川澄子

西村まさ

本多ひとみ

望月知恵子

望月敏男

雪富士を見る避難塔登りきて
廃線のプラットホームに寒桜
貯水場跡の静けさかいつぶり
夫が逝きたつた一人の大晦日
倉内の藪をかじりし嫁が君
寒波来る独り住まひの戸を堅く
葉ぼたんの薄紫に陽のあたる
天井に吊らる自転車初つばめ
冬枯れの畔や鳩らの後歩く
富士山を車窓に仰ぎ四温晴
朝日さす氷柱色めくマリア像
吊し雛遠くに海の青き風
半世紀の和菓子屋閉づる梅の花
海風ぎて冬日あまねし漁夫の墓
窓の日に少し傾きヒヤシンス
嶺々を楯に遅遅たる初日かな
産土神や児の眼輝き破魔矢受く
峽の村老の軽トラ年始かな
大小の土塊ありてもぐらの子
しろじろと雪降る町となりにけり
たつぷりのマーマレードを春立つ日
五七五の句屑火の屑吉書揚

静岡 望月 南

望月ゑい子

矢野喜久江

伊東 阪根征矢子

焼津 小梁洋子

川根本 鈴木裕一

津 瀬野喜代子

金沢 石川純子

ひとこゑのかはせみ枝に初景色
茶屋街を人力車ゆく雪景色
買初は千支の切手と日捲りと
雪しきり真向ふ山の模糊として
わが千支の「戌」ひと文字を筆始
捨て場無き雪持てあます猫車
探し得し古書ポケットに春隣
風花や松の貫く武家の門
読初や古き万象なつかしき
注連飾くぐる女湯旅の宿
人日や朝日の中に雨が降る
凍つる朝早や小児科に人の列
唐橋つひにその実を落としたり
寺普請先づは雪掻きより始む
すずかけの幹の迷彩寒の雨
踏みはづし踏みとどまりぬ凍てし中
老梅の香や宗達の五輪塔
朝ぼらけ宮の手水の厚氷
祖母の忌の緋寒桜や寛永寺
除雪車の黄色き明かり朝まだき
それぞれの好みの盃や屠蘇を受く
招福の八仙絵図や初詣

金沢 白村喜久代

河野尚子

高木艶子

道場啓子

西田たかこ

西田秀子

廣田宏美

仏手柑と鬼柚子飾り大福茶
横降りの川洲に群るる冬鷗
雪しろのあぶれて川の呻きこゑ
春暁の雷の一発玻璃揺るる
どんと焚きの煙のほひ好みをり
瓶詰めのフルーツポンチ女正月
日脚伸ぶ枝から枝の雀どち
女正月昭和を話し小半日
回覧の置かれし雪の戸口かな
搗ち氷グラスにことり寒明くる
雪降るや足跡照らす街路灯
雪吊の穂先穂先へ蔭移る
雪野原川音絶えず聞こえ来る
新築を祝ふ庭先雪だるま
雪の道静かに野辺の送りかな
冠雪の連山映ゆる落暉かな
きさらぎや水琴窟のよき音色
真冬なる波のうねりへ丸子舟
湖北路や雪のしろがねひろがり
葉牡丹の渦幾重にも久女の忌
七草粥の箸となす葦河岸に採る
城照らす灯影に映ゆる松の雪

金沢 水上依乃

宮崎惠美

保田ひろ

谷内瑞江

伊上はるゑ

大田ふじ枝

川口和代

破魔矢受け鈴鳴りとほす赤ぼくり 敦賀 中川雅月

朝市の売り女卒寿や頬被り

御鏡を飾りて堂の賑はへる

灯台を叩く怒濤や冬の月 倍野喜代子

太き首動かす猫や日脚伸ぶ

しろがねの伊吹嶺映る鴨の湖

梅蕾む若狭札所のお砂踏 前川千代枝

若布刈舟長柄の鎌の焼じるし

絵蠟燭灯せば潤む雪椿 山本一枝

茅葺きの民家やさしく雪被く

水仙花ひかへめに顔かしげをり

節分会心の鬼を追ひ出せり 若狭 藤原玉泉

七草の粥に米寿の箸のばす

暁や一番鶏の恵方みち

青年の凜凜しく年酒受けにけり 御坊 清水勝子

明けそめや母を真似たる四方拝

大和路の崩れ土塀や寒椿

灯冴ゆる玉虫の骸ビンの中 大阪 入山繁幸

病室に明るき陽差し春立ちぬ

寒垢離や唱ふる低く重き声

老僧の法話易しく涅槃絵図

笹鳴きのこころあたりか葉のゆれて 明石 前島 幸

潮騒の崖に香れる野水仙

城址にまづ臘梅の香り立つ

読みかけのページ繰る手や冴返る 徳島 林 早苗

新暦ミッキーマウスの大き耳

上弦の月山の端に凍てつけり

葉牡丹の渦ほどけゆく駅広場 宮西修一

探梅や産土神を一巡り

のろろと猫の横切る冬菜畑

着ぶくれてバスの到着待つてをり 山本晴美

福笹を客から貰ふ運転手

初句会欠席の友気にかかり

青空に風花遊ぶ城址かな 山本瑤子

冬かもめ鳴くや渦巻く海峡に

一声を落とし飛び立つ初鴉

尾を振つて犬がつきくる雪の道 石井 木内珠美

パウダーのごとき深雪を踏み帰る

親知らず少しうづけり春立つ日

冬の月卵透けたるごとく見ゆ 木内マヤ

売られゆく豚のトラック斑雪

胴長を裏返し干す蓮根畑

スキージャンプ競技みてをり寒満月 高月 巖

水仙の咲くごと亡母の遠くなる

五六歩をたのしむ春の雪の庭
紫の簪揺らし琴始

小松島

岡田あゆみ

とりどりの飴の出てくる冬着かな
夫に来る賀状やゴルフ優待日
春寒や明日売る牛を磨きをり
春の山奥に昔の弾薬庫

田上幸子

初日射すいつか津波の襲ふ町
冬晴の砂地を踏みぬ二度三度
赤鬼にそつと触れたる節分会
艶やかなミルク色なり陶器雖

福岡

相本和子

日矢射して博多は寒のゆきわたる
雪吊を初めて見たり兼六園
東尋坊岩にとびつく波の花
牡蠣小屋の牡蠣爆ぜる音する音

石原好宏

園田清子

焼芋を半分こして老夫婦
大寒波首をすくめる博多つ子
錐揉みの落葉句帳に受けにけり
凍雲やマリア絵硝子点りけり

鶴田輝代

万葉の島野菜事始かな
拍手に鯉のまきあぐ寒の瀬
山風の水面をすべる初氷
黄色きもの蠟梅となるさんぽ道

古山みどり

昏れぎはの鳴き交はしつつ寒鴉

福岡

宮田千恵子

日の射して雀飛び立つ冬障子

寒空へ湯気もうもうと露天風呂

那珂川

高山ひさ子

重ね着てラジオ体操つまづきぬ

駅ビルの足場組み終へ寒の明

屋上に鉄道神社梅ひらく

長崎

丸本祥夫

静脈の透くる手冬の薔薇を摘む

凍土の湯気を沸かせて耕せり

春潮の膨れ来たりて陸を蝕む

西海

山下敦子

梅咲けばひと顔上げて通りけり

鳥帰る夜明けの空の底目指し

磯釣の空引寄する春日和

那覇

謝花寛菅

日を溜めて風の礁湖の海雲舟

野面積む城垣春の風のぼる

校舎への長き坂道寒桜

砂川道子

初春やリュックに吊るす干支押絵

寝床より眼鏡探るや寒の朝

札幌

島崎 洋

とどの声岩礁洗ふ冬怒涛

真冬日や囲ふ腐葉土煙たつ

釣人のテント鮮やか凍結湖

園田鶴子

船揚げて漁師酒場へ流水来

地の声の噴き出すがごと雪解水 札幌 高山誓英

笑はせてどこか寂しき雪達磨

雪の足あと中央は人わきに犬 竹重富子

狢犬やシベリアふうの雪帽子 多田陽子

些かも手応へはなし福は内 田邊政代

軒つらら短きものも空の蒼

鰯鍋の太きほほ骨しやふりけり 長田秀行

銀の闇冬のいかづち轟きぬ 中鉢弘一

山の色山にもどして雪解鰯 石狩の空 鈍色に 鯨群来

身を揺すり海を揺すりて榮螺掘る こだはりの沢庵並ぶ母さん市 江別 太田佳美

寒林や青空透かし細き月 ぱりぱりと布巾の凍る朝厨 新庄 曾野部礼子

雪穴の野菜掘り出す土にほふ 大雪や小鳥は皆などどこにいる 新潟 大湊とせ

早朝の市道を走る雪除車 仏壇のわきに吊るさる大くまで 倉田松仙子

供へ酒みなおろしたり仕事はじめ 播粉木の手を休め見る春の雪 斎藤ヨシ

空覆ふ白に明るさ春の雪

炬燵が出て赤毛のアンを読み始む 新潟 佐藤シズエ
春寒し研師ですがと大漢

境内の深雪にささる松葉かな 島津治子

厨戸を開けば寄り来寒雀 特売へ一列となり雪の道 花村ヨシ子

美容室出て眩しきや冬の雷 春立てり庭木の影置く納屋の壁 燕 渡辺志ま

二ヶ月の雨雪の嵩へこませよ ペンギンの歩幅で進む雪の道 芳賀 小林元子

朝市やストープ備へ客を待つ 寒梅の紅のほどけて香り立つ 真岡 上野恭子

立春の櫻並木の風の音 咲き初むる土手の花菜の茎太し 栃木 上岡佳子

目の前に気球の来る節分会 寒満月全て欠けたる赤き影 佐野 木村君子

冬麗ランチを囲む市長室 初晴や水琴窟の澄み渡る 義本美智江

草鴨の群れて身を寄す隠れ沼 ほとほと小さき灯の福寿草 つくば 阿部より子

囀を追ひて双眼鏡を合はせけり 初咲きの山茶花一枝手折りたる さいたま 須藤初枝

雪催猫天国へ旅立てり

日脚伸ぶ何か明るく良き兆し 草加 鈴木清江

冬鳥のいとなみの声風の中

幼子のハグをしてをり雪だるま 和光 板垣陽子

声の鋭き鴉の居たり寒波来る

遙遙と広ぐる基地へ春の雪 新座 多田英治

冴返る鉢植廊下に移しやる

ばあちゃん生きてゐるだけでめでたしと 川越 榎本美代子

新春の和太鼓に酔ひ涙かな

赤き実に雀群らがる雪催 黒木敬子

寒茜秩父嶺しばし捉へたり

雪のこる蔵町に月まんまると 滝沢潤子

寒風の山の連なり富士も見ゆ

瀬戸内の潮の香強き牡蠣する 津金房子

加賀屋敷の三四郎池厚ごほり

舞ひ初めし一片の雪我に落つ 千葉 岡野恵美子

大千潟五度廻りて鳥渡る

ベランダに出ればいきなり冬の蜂 喜多恭仁子

山茶花や法事の果てて頬ゆるむ

啄みてひと声高き初鴈 櫻井住江

山茶花の蕊生々と卓の上

恋猫の野太き声のはたと止む 清水美知子

レントゲンに映らぬ痛み余寒なほ

煮くづれし蕪スープや余寒あり 千葉 高田みや子

赤鬼に帰る家あり節分会

寒明けや背すぢ伸ばして眼鏡拭く 柳澤道子

臙なる燈明川面にゆれてをり

ふたりして同じ夢みる二日かな 佐介 有泉正夫

錠剤の卓に転がる寒の入

万両が明るくしたる木の根元 杉田富美代

初詣鳥居くぐれば氣も新た

禅定の跣坐組む中に初音聞く 四街道 釋 勝信

仲見世の雑踏にある余寒かな

うろつけばのぞき見えたり梅の花 船橋 入河 大

節分の雲を貫く大公孫樹

枯木立紺碧の空展げたり 槐島 修

穏やかに暮れゆくひと日初鴈

葉の影に赤のきはだつ青木の実 中川泰夫

隣にも先を越されし雪をかく

初雀庭の赤き実あふれ挿す 吉原千恵

印刷の門松飾る鉄の門

列離れ川原走る子風光る 柏 鹿毛満子

冬柏木戸に下がりし桶の箍

雑木林まづかに染めて冬夕焼 松戸 渡部洋子

春の雪街に運河に溶けゆけり

へら浮子のぴくりともせず日向ぼこ
日を弾き冬の滝音高らかに
春の雲空の青さをきはだてぬ
空晴れて桜古木に苔青し
ひともとの白梅満つる父の忌に
白梅や一気呵成に男坂
雪しまく枝にとまれず羽博つ軋
雪の畑白波のごとうねりをり
雪とけて雪にしなりし枝残る
中折れの帽子逆さに福は内
恋猫の夜更けの街を暴走す
山頂の臘梅に会ふ至福どき
立春や人參細工の鬼を食ふ
昼飯に恵方知らずの恵方巻
罎の入る石亀濡らす冬の雨
鳩時計の音止み子から初電話
寒桜は天のかんざし観音像
箱根路や十国峠に寒施行
鉢植ゑの小さき薔薇の芽動きそむ
大寒の空にくつきり白い雲
CDの朗読つづく雪の夜
ビル街の首塚史跡雪溶けず

東京

赤松わ子

新井世紫

安藤美酒々

石山風童

湯田真理

北口富栄

鶴田智美

中ノあさ子

中山岳夫

西村サカエ

藤田信子

春時雨友と気づかずすれ違ふ
福豆を食べつゝ思ふわがよはひ
浄土と言ふ浜静まりて除夜を待つ
大杉に守られ毘沙門寒の中
雪かきの山あちこちに商店街
窓際の雪つかまんと子猫かな
くらやみの櫓はだか木ほの白し
黒々とあぢさゐの芽や寒戻る
福寿草黒土押し上ぐ子規の庭
雪の夜電車の音のやはらかく
冬耕の手にひと息し鍬かざす
仕まひ込みし縫物出して冬籠り
甲斐駒に赤き雲凍つ夕暮方
うねり来る川面に冬日輝けり
右往左往運休つづく雪の帰路
欠くる月赤く揺らめく冬の空
着ぶくれて宇宙の神秘ながめたり
福は内ビルの窓より豆が降り
供へ餅斧で割り焼く香ばしき
白雪や下界に恋して舞ひ下りぬ
今年また戸袋を出るいぼむしり
朝寒し鱗の波の隅田川

東京

松野寿美代

宮川昭子

山森明子

武蔵野

砂地宏子

府中

竹村晃子

国立

阿部幸子

南場雅子

八王子

栗原紀美

横浜

奥野周光

佐藤正美

柴田雅春

淡雪や木の根方より解け始む

横浜

鈴木律子

紅梅や日差しに光る蕊あまた

庭土を啄む雀寒明くる

富田 要

蹲の水舐むる猫春浅し

長野高朋

ゆつたりと落葉流るる五十鈴川

正木喜美代

山眠る伊勢路の社鎮もりて

青木明代

手焙りと言ふもなつかし母の居て

大久保 進

街燈のおぼろや雪の降り止まず

高野翠子

めでたさや我正月も一茶ほど

安田良子

水仙や仲よき姉妹の薬剤師

横山ユキ子

なぞる手に術後の痕の余寒かな

佐藤千晴

ほころびの薄紅梅や退院す

湯浅政男

兄の跡弟踏みて雪の道

吉田紫火

梅林をはるかに一輛電車かな

吉田紫火

蛇行する深き足跡雪の道

吉田紫火

白梅の老木潜り筆塚へ

吉田紫火

春の日をゴトゴト刻む貨車の音

吉田紫火

老僧のもつと寄られよと春火鉢

吉田紫火

千両は嬉しき程の実をつけし

吉田紫火

布草履霜焼け指にやさしかり

吉田紫火

冬の蠅福宜の背中で手を合す

吉田紫火

たんぽぽや線路錆びたる江の島線

吉田紫火

見舞ひたれば笑顔の甥に春日和
松本 藤森利子

決算書清書庭先福寿草
金沢 北野陽子

凍てし日に出会ふ人なしポストまで
白山 朝倉みゆき

大拙館碑映す氷面鏡
鶴尾正江

除雪車の大き雪塊落とし行く
中石紀美代

客迎ふ備前の大壺寒ざくら
内池宏行

グレンデに人ひとひとや猿は木に
吉川禮子

夜な夜なや梟羽ばたき闇ゆらぐ
吉田紫火

室咲や花びら大きチューリップ
吉田紫火

雪霏霏と降る宿場町こゑもなし
吉田紫火

大寒や陶器の象の目の潤む
吉田紫火

せせらぎに日差しに遊ぶ猫柳
吉田紫火

子等からの牛肉甘し牡丹の芽
吉田紫火

よき友の急死に欠けし寒の月
吉田紫火

冬晴や雪に影置く並木道
吉田紫火

残る雪獵師分け行く獣道
吉田紫火



万象作品の佳句

飛 高 隆 夫

仁王像見比べて子の初詣 桔梗 純

仁王は伽藍守護の神で、この句の場合はお寺の門の両脇に安置されている。一方は口を開き、もう一方は口を閉じている。初詣のために親に連れて来られた子供が、夢中になって、二つの像を見比べている。子供は家に帰っても、仁王の話ばかりをするだろう。それがこの子の初詣の収穫なのだ。子供の生誕をよくとらえている。作者は町田の人。

昼近く野焼の風の散らばれり 澤 照枝

燃え盛っていた野焼きの火も、昼近くなると大方おさまった。今はあちらこちら、とどころで炎を上げていいるばかりであるが、そこだけに、風が散らばって吹いて燃え立たせてる、と見たのが面白い。作者は土浦の人。

葺替へし茅匂ひ来る多摩郡 南雲 秀子

茅葺き屋根は、茅の入手の困難や、技術者の減少などから次第に数を減らしている。この句、その茅葺き屋根を葺き替えた、茅の新鮮な匂いが漂って来る、というのである。多摩

郡という、武蔵の国の古い郡名の採用が、その珍しい事実を素直に納得させる。作者は所沢の人。

高きより鳶の御慶や三龜山 茂木 弘子

三龜山は栃木県佐野市の山。平野の真ん中にこんもりと盛り上がっている。その山の上空に鳶が輪を描きながら、びひよろろと、鳴き声を落とす。その声を、作者は鳶の新年の祝詞と聞き留めたのである。三龜山への親愛の情から生まれた楽しい句。作者は佐野の人。

風切羽の瑠璃鮮やかに残る鴨 宮本 加津代

風切羽は翼の一番外縁の大きい羽。羽を閉じると一番後ろに見える部分。冬を日本で過ごした鴨は、春になると北方に帰るが、怪我や病気など何等かの事情があつて、帰れない鴨もいる。残る鴨のその事情に思いをやると、瑠璃色の風切羽の美しさも心にしみる。作者は船橋の人。

流木に朱の脚並ぶ百合鷗 岩崎 武士

百合鷗は小型の鷗。白い羽に赤い嘴と赤い脚との対照が優美である。流木は浜辺に横たわっているものであろう。その流木に百合鷗がずらっと並んでいる。作者はその脚の美しさに惹かれた。流木は水と日と風とに晒され白くつやつやと光っていたのかもしれない。だから脚が映えた。作者は静岡の人。

吹雪かれて聖橋より地下鉄へ 喜多尾明子

聖橋は中央線御茶の水駅のすぐ脇、神田川にかかる橋。橋の西側すぐにニコライ堂、東側に湯島聖堂がある。「万象」の中央新年俳句大会が催されるビルに徒歩一分。橋を東に渡れば、すぐ地下鉄の御茶の水駅。東京のことだから、吹雪くといっても、降雪に強い風が加わった程度であるが、作者はそくさと地下に潜り込んだのである。作者は日野の人。

炉話に熊の剥製立ち上がる 吉野美智子

炉話は、囲炉裏のある家も昨今は減るばかりであろうから冬の夜話と読んでもいいが、この句、部屋には熊の剥製もあり、たしかに囲炉裏が存在する。家族に近隣の人も加わって囲炉裏を囲む語らいの中で、話が熊を仕留めた場面に及んだところで、俄かにその剥製の熊が立ち上がった、ように思われた、と読んだが、いかがであろうか。作者は静岡の人。

娑羅の芽のしろがね色や二月来る 黒川しげ子

対象を素直に写生している。それだけといってしまうとそれだけのことであるが、娑羅の芽は近付いてくる春を、また、しろがね色は二月の光の眩さを、それぞれ予感させる。たしかに「二月来る」である。写生の大切さを教えてくれる。作者は佐野の人。

真夜中のガラス戸に来る春一番 石川幸子

春一番は、立春の後、初めて吹く強い南風。時に大きな被害をもたらす。作者は真夜中にガラス戸ががたと鳴る音に目覚めたのであろう。そして、ああ、春一番だと気付いたのである。そして、春一番が家の中で一番弱いガラス戸に狙いを定めて攻めてきたように思い、苦笑いをしたのである。作者は松戸の人。

以下、三句組から。

すずかけの幹の迷彩寒の雨 西田たかこ

すずかけ（篠懸）の木、つまりプラタナスの幹は白い樹皮が剥がれた部分は、薄い茶色や草色が入り交じって、まさに迷彩を成している。その幹を寒の雨が濡らしている。見慣れた気にもかからないものを見直させる句。作者は金沢の人。

笹鳴きのこころあたりか葉のゆれて 前島 幸

うぐいすの習性なのだろうか。その姿を見ることはなかなか難しいらしい。笹鳴きとなると一層そうなのだろう。だからこそ見てみたい。作者のその姿を探す心躍りが、軽い口調に現れている。作者は明石の人。

冬かもめ鳴くや渦巻く海峡に 山本瑤子

鳴門海峡であろう。潮流が大渦を巻き起こしながら音をとどろかせる。その潮の音を抜けてかもめの細く澄んだ声が聞こえる。「鳴くや」と強く切ったリズムもよい。作者は徳島の人。

二月三日、節分の日。大雪の名残がそこかしこに残る風の冷たい上野公園。新年最初の中央句会には二十八名が参加した。この日の主役は東京の下嶽孝一さん……なんと出句した四句すべてが主宰選に入った。採った主宰も「今日は周波数が合ったのか、こんなことは珍しい」と驚いた。

崖の星またたき磨く水仙花 下嶽孝一
水仙の群生しているところは険しくて風の強い場所が多い……越前岬、淡路島、富津金谷。夜空に星がきらきら光り、それが水仙の花を磨いているように感じた。優しい言い方の「水仙花」を、「野水仙」としたいところ。(良)

わらわらと道にこぼるる寒雀 内田郁代
寒雀が木の枝などからまとまって降りてくるのはよく見かける。「わらわら」という表現が、寒雀の様子をきちんと捉えている。陽だまりも感じられる。(隆)

保育士が花屋をのぞく春隣 下嶽孝一
「春隣」という季語と、保育士が花屋をのぞいたという物語の關係がとても新しい。季語とそれを取り巻く物語性を発見してゆくと、句に新しみが出てくる。(良)

大寒の大寒らしき葛西橋 内海良太
「葛西橋」という言葉の使い始めは石田波郷。「大寒の大寒らしき」と言われると肯いてしまうしかな。(隆)

竹の秀に昼月淡し春隣 増田幸子
竹の秋が近づいてだいぶ黄色くなってきた。その天辺に白っぽい昼月がかかり、作者は春の訪れの近いことを感じている。「竹の秀」と「昼月」の取り合わせが魅力的。(悦)

春めくや心ほぐる人とゐて 綱島 清
即物具象といつて俳句をやっているが、こういう句もいい。心がほぐる人と共にいるのはいいものだ。「春めく」という季語がびたりとはまっている。(良)

葦替へし茅匂ひ来る多摩郡 南雲秀子
茅の葦き替へは昨今では珍しい。共同作業があったのか、その葦き替える茅が匂ってきた。「多摩郡」という固有名詞、鄙びた言葉の手触りが生きた句。(悦)

星冴ゆるあかがね色に蝕の月 飛高隆夫
先日の皆既月食、あの色にはいろいろな表現の仕方があった。星もはつきりと見えていた。「星冴ゆる」の季語が生きている。「蝕の月」という措辞にも感心した。(悦)

穴稲荷灯に節分の風少し 江見悦子
地味な句だが情景がよく出ている。祠の中に稲荷を祀っていて蛸燭の灯が絶えない。節分の日、少し風が出てきて、灯が少し揺らいでいる。印象的な風景。(良)

(中村千久)

みかも句会 亀田 やす子

原句 四重奏の調べうつとり春の宵

添削句 春の星いまだ余韻のカルテット

四重奏の演奏会の席で、その調べにうつとり聞き入っている句。夜の演奏会ともなれば、心身ともに落ちついて演奏を聞く至福の時である。中七の「調べうつとり」ではそのままを表現したに過ぎない。寧ろ、聞き惚れた四重奏の余韻が、会場出てもしばらく残っている状況を詠み、「いまだ余韻の」とその時の雰囲気を実現したい。下五に「四重奏」でも良いが、ここはリズム感ある「カルテット」では。季語は、柔らかに瞬く「春の星」が四重奏の曲にふさわしいと思う。

原句 春昼や客待つ店主深呼吸吸

添削句 春光や客待つシェフの深呼吸吸

原句の「客待つ店主」では、どういう店なのか、どのような客を待っているか想像がつかない。一読してどんな場所か映像が浮かぶよう、心がけることが必要である。

深呼吸をして客を待っている店では、余暇暇なのではと受け取られてしまう。それでは句にならない。そこで、「店主」を「シェフ」とすればイタリアンかフレンチのレストランか想像できる。準備万端整えたシェフが予約の時間を待って一呼吸入れている場面が浮かぶ。また「春昼」の季語では「深呼吸」とつきすぎる。「春光」あたりが適当であろう。

すずしろ句会 山本 麓潮

原句 三方湖に肥る寒鯉たたき漁

添削句 大ぶりの寒鯉躍るたたき網

たたき網漁は、三方湖に伝わる独特の原始的漁法で、他には例を見ない。若狭の冬の風物詩の一つでもある。冬季に湖底に潜む鯉や鮒に対し、青竹で水面を叩いて驚かせ、仕掛けた刺し網に追い込む漁である。小浜藩の古文書には「タタキ網」という表現もある。「肥る寒鯉」ではなくて「大ぶりの寒鯉躍る」で豪快でダイナミックな漁を表現したい。

因みに三方湖は、万葉集に「若狭なる三方の海の浜清みい行き還らひ見れど飽かぬかも」とあり歌枕の地でもある。

原句 的を射る弓の唸りて弓始

添削句 奉射講の弦音うなる弓始

敦賀の高野という集落に「毘沙講」という伝統行事がある。産土神の白山神社の新年の神事であるが、三百五十年の歴史の中で奉射講が誤り伝えられたものと思われる。

朝まだき、男衆六人が禪一つの水垢離のあと、神みそなわす神域で、青竹の矢を射て悪霊退散と無病息災を祈る。身が引き締まる弓始である。弓始には弓道場のものもあるので、「的を射る」は削除して、奉射講を入れたほうが明確になつて良いのではと思われる。また「弓の唸る」ではなく、「弦音うなる」の表現の方が、白山権現の神前で弓始らしい厳しさの確に眼前に浮かぶのではないだろうか。

「万象」中央句会二月例会

平成30年2月3日
東京文化会館28名

内海良太主宰選

崖の星またたき磨く水仙花
保育士が花屋をのぞく春隣
合体ロボ並べし吾子の雛祭
新しき幣立つ祠枯野道
明日立春鴉甘鳴く上野山
雪かむり狛犬の威を正しけり
顔のみの大佛に結ふ受験絵馬
当選の万歳三唱凍てとばす
不公平に鮪を分くる寒明忌
春めくや心ほぐる人とおて
春隣予後の余生にやや自信
をんどりに蹴られし事も寒卵
朝の驚雪より白く啼きゆけり
穴稻荷灯に節分の風少し
師の墓へ供花溢れたり寒日和
飛高隆夫選

下嶽孝一
下嶽孝一
下嶽孝一
中村千久
江見悦子
飛高隆夫
小池宗彦
内田郁代
吉中愛子
綱島清
下嶽孝一
長谷川信也
増田幸子
江見悦子
山本絢子
内田郁代
内海良太
田中道江
岡村純子

欠け終り月茜色春近し
赤銅の皆既月食星冴ゆる
幾度も寒の月食仰ぎけり
雪しまく一日ボレロでも聴くか
深雪晴薄墨色の雑木山
大寒の大寒らしき葛西橋
江見悦子選

叱られて子は冬帽子くしやくしやに
月蝕を確かめ大きくさめかな
春立つや机一つの駐在所
竹の秀に昼月淡し春隣
極寒の猫にも在りし夜叉の貌
待春や無人駅舎の雪しづり
赤鬼を父とは知らず追儼寺
丸描きて地べたの遊び春隣
葺替へし茅匂ひ来る多摩郡
星冴ゆるあかがね色に蝕の月
江見悦子

「万象」同人句会二月例会

平成30年2月25日
俳句文学館362名

内海良太主宰選

遅春の秩父に兜太逝きにけり
苗植ゑし学有林の杉の花
耕しの耕運機に載す竹箒
藤田裕子
奥太雅
奥太雅

五軒目の店頭にあり落のたう
雪雫やみたる夜は星匂ふ
三輪山に夕日かくるる雨水かな
切株のギターケースや犬ふぐり
清掃工場のホール華やぐ吊し雛
落椿流れに揺れて流されず
あれこれと大小の函雛飾る
お遍路や一粒丸を買ひもして
十年経し臘梅初の一花かな
芦かびや足跡大き沼のへり

小林愛子選

遅春の秩父に兜太逝きにけり
姉の忌を過ぎ出初めたる桜餅
傷口を舐めゐる猫や風生忌
龍天に兜太の舌鋒今一度
昨日より今日の囀り兜太亡し
やはらかに朝日浴びたり春の夢
お手玉の遠くに逸れて春炬燵
氷柱より日の出る村や裏筑波
安吾の忌人形町をうろつきて
芦かびや足跡大き沼のへり
原田しずえ選
紅梅や迷へば右に曲がる癖

柳澤宗正
小林珠江
山田春生
加賀葉子
久留島規子
赤堀洋子
江見悦子
内田郁代
松原三枝子
原田しずえ

藤田裕子
小林珠江
新妻奎子
須賀允子
原田しずえ
山本とく江
三屋英俊
内海良太
須賀允子
原田しずえ
水野加代

寒明や妻エナメルの靴を履き
草萌の牧将門が夢の跡
三輪山に夕日かくるる雨水かな
切株のギターケースや犬ふぐり
どこまでも空は浅葱に春来る
二ヶ月の光たつぷり夫の墓
ふくやかに笑まふ大内雛かな
税務署の窓磨かれて風花す
黄門の衣装貸し出す梅の園
恒川清爾
三屋英俊
山田春生
加賀葉子
水野加代
新妻奎子
榎本文代
内海良太
山田春生

▽中央句会 5月5日(土) 東京文化会館 午後1時より

▽同人句会 5月27日(日) 俳句文学館 午後1時より

第十七回「万象」全国俳句大会(予告)

開催日 平成三十年十月二十九日(月)

会場 ホテル ラングウッド

東京都荒川区東日暮里五〇一五

☎〇三—三八〇三—一二三四

交通 JR・京成「日暮里」駅南口より徒歩一分

日暮里舍人ライナー「日暮里」駅徒歩三分

大会 午後一時開始

「万象」東京支部発足三周年記念俳句大会案内

「万象」東京支部発足三周年記念俳句大会を、内海良太主宰、小林愛子副主宰のご出席の下、左記の通り開催いたします。多数の皆様のご参加をお待ちしています。

日時 平成三十年六月十二日(火)

受付 十二時から 投句締切：十二時四十五分(三句)

注：会場は飲食禁止。昼食を済ませてご参加下さい。

会費 千円

開会 午後一時

句会 午後一時三十分～四時三十分(会場へは午前十一時半より入室できます)

会場 「日暮里サニーホール」コンサートサロン
ホテルラングウッド四階

ホテルラングウッド四階

(十月の「万象」全国大会の会場に同じ)

東京都荒川区東日暮里五〇一五

☎ 〇三―三八〇七―三二一

交通 JR・京成「日暮里」駅南口より徒歩一分

日暮里舎人ライナー「日暮里」駅より徒歩三分

根岸 子規庵・谷中墓地・につぼり繊維街・

朝倉彫塑館等

申込 五月二十九日(火)迄に葉書又はファックスで左記へ。

〒194-0091 東京都町田市玉川学園三―一〇―一九

桔梗 純(☎・FAX 〇四二―七二六―〇一七四)

珈琲タイム

16

【問1】夏の名句です。空所を埋めましょう。

1. やはかなき夢を夏の月 松尾芭蕉

ア 蛸壺 イ 野仏 ウ 古井戸 エ 古里

2. 藍々と五月の 雲を出づ 飯田蛇笏

ア 赤城 イ 浅間 ウ 白根 エ 穂高

3. プラタナス夜も なる夏は来ぬ 石田波郷

ア 清ら イ 静か ウ はるか エ みどり

4. さざなみの 吹くごとく夏来る 山口青邨

ア 風 イ 網 ウ 時 エ 箔

5. うすものの中より の鍵を出す 鷹羽狩行

ア 金 イ 銀 ウ 蔵 エ 部屋

6. アラビヤの空を我ゆく夏の 星野立子

ア 雲 イ 空 ウ 星 エ 山

【問2】夏の季語を五つ選びましょう。

1. 朝顔 2. 甘酒 3. 踊 4. 竹落葉 5. 西瓜

6. 原爆忌 7. 蟹 8. 泥鰌鍋 9. 氷雨 10. 水鳥

【問3】清記は正確に！一字直して校正しましょう。

1. 蜂さされが直れば終る夏休み 細見綾子

2. 更衣海おだやかに暮れるかな 鈴木真砂女

3. 方丈に今届きたり新茶かな 高浜虚子

4. 峡の田の蓮におはる没日かな 加藤楸邨

(解答は本号の『東西南北』のページにあります。)

「万象」組織と業務分担

(平成30年4月)

名誉主宰	大坪 景章
主宰	内海 良太
副主宰	小林 愛子
顧問	原田しづえ 山田 春生 福島せいぎ
発行人	内藤 恵子
編集人	小林 愛子
万象作品選者	江見 悦子
総務	飛高 隆夫
会計	内田 郁代
監査	竹澤 竹里 山本とく江
編集係	江見 悦子 中村 千久 榎本 文代
	大木 茂(兼)
	久留島規子 三屋 英俊
	桔梗 純
	内田 郁代
校正係	吉中 愛子 水野 加代 松原三枝子
	古川 京子 藤田 裕子 田中 道江
	山下 良江 大橋 雅子 加賀 葉子
発送係	山本とく江 久留島規子 中村 千久
総務部	○内田 郁代
事業部(30年度)	藤田 裕子 古川 京子
・新人貸事務局	

・万象俳句貸事務局 榎本 文代
・全国俳句大会 中村 千久(実行委員長)
・中央新年俳句大会 卯辰 美苗
・俳句カレンダー 内田 郁代
月例作品受付

同人作品 内海 保子
万象作品 藤田 裕子

「万象」同人会役員

(平成30年4月)

会長 柳澤 宗正
顧問 原田しづえ 山田 春生 福島せいぎ
副会長 内藤 恵子 山本 麓潮
幹事長 吉中 愛子
副幹事長 古川 京子
幹事 松原智津子 佐藤 雄二 亀田やす子
中村 千久 (奥 太雅) (古川京子)
沢辺たけし 江見 悦子 (吉中愛子)
(榎本文代) 神田美穂子 井村 和子
倉谷 紫龍 呉屋 菜々
会計 奥 太雅
監査 榎本 文代

※カッコ内は兼務

句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事	電話番号
若 草	第1土・1時	中央公民館長町館	田村愛子	田村愛子	076-242-1563
柊	第1水・1時	新保ふじ子宅	新保ふじ子	西田たかこ	076-263-2714
蘭	第3水・1時	泉野図書館	井村和子	後藤・豊田	076-231-4717
ふれあい	第1,3水・1時半	田鶴浜サンビーム日和丘	谷渡末枝	谷渡末枝	0767-68-2187
敦 賀	第1,3金・1時	北公民館	石田野武男	山本麓潮	0770-23-0023
萩の風	第4木、第4火、 第3木・1時	生涯学習センター	山本麓潮	田嶋豊年	0770-23-6444
まつかぜ	第4火・1時	北公民館	石田野武男	山本みゆき	0770-23-0023
た つ み	第2日・1時	南公民館	石田野武男	石田野武男	0770-25-0026
すずしろ	第2土・1時	北公民館	山本麓潮	山本みゆき	0770-23-0023
徳 島	第4土・2時	万福寺	福島せいぎ	福島吉美	088-625-1500
芙 蓉	第1水・1時	男女共同参画センターアミカス	小林愛子	石原好宏	090-8229-4181
真 南 風	第1土・3時	ふう	前田貴美子	前田貴美子	098-834-7086
ふ う	第4木・7時	ふう	前田貴美子	前田貴美子	098-834-7086

毎月25日発売
定価1200円(税込)

俳句界

2018年5月号

別冊 投稿俳句界 一流選者28名！
日本一充実の投句欄

対談
佐高信の甘口で「コンニチハ」！
山尾志桜里 (衆議院議員)

私の一冊
田島和生
*セレクトシヨウ結社「いぶき」今井豊 中岡毅雄

発表！ 第10回文学の森賞
*セレクトシヨウ結社「いぶき」今井豊 中岡毅雄

特集 句集を作ろう！
【座談会】句集の魅力とは
大高霧海×日下野仁美×辻村麻乃
●句集出版は、自分を振り返る絶好の機会
●句集を出版してよかったこと
●句集を作るにはどうすればいいの？

特別作品50句 **田中陽**
「クラビ」俳句界NOW 伊藤晴子
21句 川名つぎお 山崎十生 和田華凜

特集 俳句評論鼎談
大輪靖宏 (輪主筆 国文学者)
坂口昌弘 (短詩型文学評論家)
角谷昌子 (未来図) 同人

**現代俳句の問題点、
俳句評論の問題点**

※一部変更の可能性あります。

株式会社文学の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事	電話番号
横 浜	第2日・1時	かながわシブザ	小 林 愛 子	卯 辰 美 苗	046-872-0824
横浜洪福寺	第2土・正午	ほどがや地区センター	小 林 愛 子	正木喜美代	045-332-2477
保 土 ヶ 谷	第2木・正午	西谷地区センター	小 林 愛 子	久 松 和 子	045-381-0576
ひ ま わ り	第4木・1時	小林愛子宅	小 林 愛 子	西 本 才 子	045-311-4140
あ さ ひ	第4火・正午	上白根コミュニティセンター	榎 本 文 代	後 藤 晴 子	045-954-1519
磯 子	随 時	杉田地区センター	仲 山 秋 岳	仲 山 秋 岳	045-761-7105
金 沢 文 庫	第3日・1時	谷津坂会館	大 橋 雅 子	加 藤 和 子	045-773-6961
戸 塚 品 濃	第2月・1時	品濃クラブ	浅 井 敦 子	恒 川 清 爾	0467-32-6578
ミ モ ザ	第1木・10時半	榎本文代宅	榎 本 文 代	榎 本 文 代	045-953-4246
川 崎	第1日・1時	教育文化会館	柳 澤 ・ 新 妻	新 妻 奎 子	044-573-9249
桐 の 花	第3月・10時半	俳句文学館	福 田 雅 子	須 賀 ・ 赤 堀	03-3729-9554
伊 勢 原	第4水・10時	中央公民館	吉 中 ・ 佐 藤	佐 藤 和 子	0463-93-3979
茅ヶ崎あかしあ	第1火・1時	三澤治子	三 澤 治 子	久保田富士子	0467-86-5847
静岡青葉	第4日・9時半	大里生涯学習センター	神田美穂子	吉野美智子	054-281-9827
静岡 葵	第1日・1時半	大里生涯学習センター	荻野加壽子	石 川 裕 子	054-282-8577
静岡大里	第1水・1時	大里生涯学習センター	藤原千代子	藤原千代子	054-286-3719
静岡木曜	第3木・1時半	大里生涯学習センター	大 長 文 昭	大 長 文 昭	054-282-1063
小 判 草	第1日・9時半	静岡市番町市民センター	小 川 明 美	松 永 光 代	054-283-6233
初花教室	第3水・1時半	大里生涯学習センター	交 代 制	藤原千代子	054-286-3719
登呂通信	月1回	(投句・通信)	曾 根 満	小 川 明 美	054-283-6233
井川お茶壺	第4土・3時	井川小学校	海 野 勲	長 島 操	054-260-2058
井川山法師	第4土・3時	井川小学校	大 村 峰 子	望月知恵子	054-260-2149
井 川 聖	第4土・7時	南アルプス井川観光会館	海野みち子	宮崎みゆき	054-260-2417
富士花野	最終金・9時半	富士駅北まちづくりセンター	神田美穂子	縣 昌 司	0545-63-5697
富士吟行	随時	吟行地	神田美穂子	当 番 制	0545-78-0591
あ か ね	第1木・1時	四高記念館	井 村 ・ 谷 渡	後 藤 ・ 豊 田	076-231-4717
白 菊	第4水・1時	西光寺	中 條 睦 子	佐 野 和 子	076-261-2997
尾 山	第4日・1時	長町研修館	岸川素粒子	岸川素粒子	076-237-5185
い づ み	第3月・1時	泉野図書館	田 村 愛 子	田 村 愛 子	076-242-1563
や よ い	第3木・1時	泉野図書館	田 村 愛 子	水 上 依 乃	076-244-1530

句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事	電話番号
千 葉	第2土・1時	船橋市勤労市民センター	大坪景章 良太・恵子 とく江・たけし	赤堀洋子	047-464-5946
東 船 橋	第3日・1時	船橋市勤労市民センター	吉中愛子	久保村淑子	047-462-3711
小 金 原	第2,4金・1時半	小金原老人福祉センター	沢辺たけし	野田成夫	047-341-7402
西 千 葉	第1日・1時	千葉市C.C.松波分室	大坪景章	赤堀洋子	047-464-5946
成 田	第1日・1時半	四街道市文化センター	良太・佐々木・太雅	塗木翠雲	043-312-0849
う す ん	第3月・1時	臼井ニココ会館	内海良太	内海保子	043-489-5661
し お さ い	第4水・1時	船橋市勤労市民センター	内藤・松原三	片桐帆一	047-426-4376
都 賀	第2日・1時半	都賀コミュニティセンター	内海良太	岡野恵美子	043-255-6577
柏	第2日・1時	柏市中央公民館	山本とく江	沢辺たけし	04-7153-4910
宮 の 杜	第3火・正午	船橋市宮本公民館	良江・幹也	櫻井住江	043-256-6898
東京吟行	奇数月	吟行地	山田春生	内藤恵子	03-5605-8445
東京俳句スクール	第2火・1時半	高井戸地域区民センター	春生・悦子	吉中・藤田	044-986-1667
練馬辛夷	第2水・9時半	練馬勤労福祉会館	山田春生	宮脇秋峯	03-3925-4470
成増けやき	第2木・1時	板橋区立アクトホール	原田しずえ	下 嶽 孝 一	090-3540-7471
本 郷	第3水・1時半	文京区男女平等センター	山本右近	桔梗 純	042-726-0174
杜 の 会	第1火・1時	文京区男女平等センター	内藤・山本	草間三香子	03-3975-5983
花 桐	第2水・10時	俳句文学館	三枝正子	加賀・喜多尾	03-3392-3281
花桐吟行	第3土	吟行地	正子・允子	加賀・喜多尾	03-3392-3281
小 松 川	第1日・10時	松葉会館	江見悦子	田崎・長谷川	03-6324-5796
卯 月	第3火・1時	練馬勤労福祉会館	谷田部 栄	松本幸男	03-3978-5226
北 町	第1日・1時	北町地区区民館	谷田部 栄	島野ひさ	03-3934-6565
さ く ら	第2日・1時	練馬光が丘図書館	谷田部 栄	長谷川信也	03-3931-6200
青 の 会	第2土・1時半	木内徴子宅	徴子・允子	中嶋かつえ	03-3321-8263
大 泉	第1水・1時	練馬勤労福祉会館	谷田部 栄	徳竹良子	03-3924-4126
国 立 泉	第3日・1時	国立福祉会館	内藤恵子	生駒・阿部	042-321-7532
青 梅	第2土・1時半	青梅福祉センター	内藤恵子	藤盛・青柳	0428-22-9070
青梅吟行	隔月	吟行地	内藤・小林	小林珠江	0428-22-6721
華	第1土・1時	シビル	疋田華子	中島鈴子	042-536-9123
浜 田 山	第4火・1時	PCHグリーンハウス	江見悦子	久留島規子	03-3331-8585

「万象」句会一覧

平成30年4月1日現在

句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事	電話番号
中 央	第1土・1時	東京文化会館	内海良太 隆夫・悦子	田中・加賀	043-299-2847
同 人	第4日・1時	俳句文学館	内海良太 小林・原田・山田	松原・久保村	04-7164-8475
札 幌	第1、3土・1時	道民活動センター	松原智津子	濱谷和代	011-873-7008
札 幌 北	第1、4日・1時	篠路コミュニティセンター	岡本敬子	恵子・康博	011-771-9312
札 幌 清 風	第3日・11時	札幌真如院	大内和憲	大内マキ子	011-707-2259
札 幌 円 山	第2火・6時	円山商店	松原智・濱谷	北浦詩子	090-9085-4391
苫 小 牧	第1金・10時半	林 陽子宅	林 陽子	落合裕子	0144-36-3822
新 潟	第1日・1時	新潟市中央公民館	佐藤雄二	中塚滋子	025-265-4919
新 潟 芽 柳	第3日・1時	新潟市中央公民館	佐藤三男	倉田松仙子	025-222-8924
河 交	第3日・1時	新潟中地区公民館	佐藤雄二	佐藤幸示	025-268-3232
佐 野	第1木・1時半	佐野城山記念館	駒形祐右子	阿部 澄	0283-23-0747
風 車	第2土・1時	佐野城山記念館	大木 茂	芝宮留美子	0283-25-2155
昂	第3水・1時半	佐野城山記念館	亀田やす子	島田和枝	0283-23-0505
み か も	第3日・1時	関川町公民館	亀田やす子	義本美智江	0283-24-2668
新 樹	第1金・1時半	佐野城山記念館	増田幸子	上岡佳子	0282-62-5138
草 笛	第3土・9時半	旗川地区公民館	加藤季代	戸叶以久	0283-23-6530
皐 月	第1月・1時半	城北地区公民館	増田幸子	黒川しげ子	0283-23-9596
す ず か け	第3土・1時	佐野城山記念館	増田幸子	飯塚満里子	0283-23-2725
佐野合同吟行	毎月25日	吟行地	亀田やす子	鍋島広子	0283-23-7297
二 荒	第1木・1時半	宇都宮市中央公民館	阿久津勝利	安久都 登	028-621-5780
芳 賀	第2土・1時半	芳賀町民会館	勝利・かし子	見目トキ子	028-678-1240
つくば吟行	第1日・10時	吟行地	松尾芳子	阿部より子	029-824-1668
川 越 初 雁	第1金・1時	川越中央図書館	原田しづえ	津金房子	049-232-0362
志 木 木 犀	第2日・1時	柳瀬川図書館	原田しづえ	守山勝江	090-8115-6550
浦 和	第3日・1時	さいたま市民会館うらわ	飛高隆夫	中村千久	048-472-2734
所 沢	第3金・1時	新所沢コミュニティセンター	水野加代	森岡恵子	04-2942-2406
所 沢 吟 行	月1回、曜日不定	吟行地	水野加代	森岡恵子	04-2942-2406

東 西 南 北

消 息 等

大坪景章名誉主宰のお見舞いへ 3月

5日、再校の仕事を進ませた吉中愛子と江見悦子が入院先へ伺い、折よく居合わせた主宰ご夫妻と一緒に、お話しすることが出来た。夕食前でもあり、持参の大粒の苺を美味しそうに召し上がった。

名誉主宰のページ、「俳句界」3月号に

「賑やかな高齢者俳句」と冠して特集が組まれた。その中の「90歳以上の俳人、作品とエッセイ」に、他の六人の俳人と共に紹介された。90歳以後の自選五句は、冬立てば背筋伸ばして古ソフト

活けられし河津桜の枝ごつごつ
春ならひけふも眼鏡の行方かな

青空を正面にして椽の花
空中に月は笑へり新しく

小林愛子副主宰の句、「春耕」2月号に

鑑賞『現代の俳句』に、「万象」2月号掲載の「湯のあとはゆるやかに着て居待月」が紹介され、藝目良雨氏が鑑賞。十五夜、十六夜、立待月そして居待月。陰暦の十八日目の月が居待月。暮れてか

らしばらくして昇る月であるから、作者は月を愛でる前にゆつくりと湯を使つて身に付けた着物もゆるやかに身に纏つたのだ。――後略――

俳人協会第47回総会に出席 3月6日

の総会に、内海良太主宰、小林愛子副主宰、山田春生顧問、内田郁代総務、江見悦子編集人が出席した。全国からの参加者は446名、大串章会長からは①29年度は計画通り諸事業を遂行した②財政は健全である③会員の平均年齢が76歳であることから、高齢化対策と若手対策を進めたい④3年後の創立60周年に向けて協会の活性化を目指したい、と挨拶があった。第57回俳人協会賞を始め各受賞者の挨拶の中で、誰もが「写生」の重要さに触れていたのが印象に残った。

第三十四回日能忌俳句会開催 3月3日、敦賀市西公民館で行われ、次の皆さんが入賞した。

二席

古籬に留守を預けて日能忌 前川千代枝

三席・選者特選

琴弾鳥啼く朝すがし日能忌

鶴田勝子

選者特選

日能忌格の花のほころびぬ

川口和代

縄塚の日だまり蔽ふ大ふぐり

倉谷紫龍

お知らせ

神奈川近代文学館13号より 3月17日

(土)から5月13日(日)まで、特別展「生

誕一四〇年与謝野晶子展 こよひ逢ふ人

みなうつくしき」が開催される。

4月23日(月)には第十一回「万象」

神奈川県支部吟行会が行われる。その時にも訪ねては如何。

(報・江見悦子)

『珈琲タイム』の解答

【問1】 1 ア 2 エ 3 エ

4 エ 5 イ 6 ウ

【問2】 2 4 7 8 9

(順不同)

【問3】 1 直れば↓治れば

2 暮れる↓暮るる

3 届きたり↓届きたる

4 おはる↓をはる

三十年

万象作品
九月号

(六月十五日締切)

(句の表記は歴史的かなづかいで)

都または市・町・村名	がふり
姓 号	
	年齢

[illegible]

送り先 〒166-0003 東京都杉並区高円寺南3-52-8 藤田裕子

新規会員を紹介します	
姓	号
郵便番号 〒	
住	所

投句者住所 〒

.....

.....

投句者姓号

電話

.....

あとがき

▽一年間「俳書探訪」をお願いしていた山本とく江さんの執筆が今月号で最後になります。他結社の俳誌につきぶさに目を通して伝えて下さり、「万象」誌の編集にも多くのヒントを頂きました。有難うございました。(江見)

▽中央句会、同人句会では、主宰の指導を直に受けることができます。二月の同人句会には、静岡からもういらして和やかな交流の場も出来たようです。中央句会では会員の方も自由に参加できます。誘い合つて、吟行を楽しみながら、句会に参加してみませんか。

(文代)

▽毎年三月中旬に行われる渡良瀬川遊水地の壮大な葦焼きには、多くのカメラマンや見物人が訪れます。この光景は俳句に詠まれますが、その歴史に思いを馳せると複雑です。(茂)

▽三月に金子兜太さんが亡くなりました。独自の句境を開かれた兜太さん

は埼玉を代表する俳人でした。政治について発言と行動を続けた生き方を尊敬していました。精神の若さは年齢とは無縁であることを教えていただきました。ご冥福を祈ります。(千久)

▽ゴールデンウィークが明けると、季節は一気に初夏を迎えます。一般的には六月一日が衣更ですが、この頃から夏服の出番が増えてきます。近年は新暦でも五月は既に夏ですね。(規子)

▽広告の兜飾りを見ていて、子供の頃新聞紙で兜を作り、被つて遊んだことを思い出した。懐かしくなつて新聞紙を折つてみた。手が自然に動いて立派な兜ができて上がつた。こんな素晴らしい五月飾りはないと、それを飾つて一人で悦に入っている。(英俊)

▽寄せ植えのシクラメンが咲き、ようやく玄関前が華やかになりました。芽吹きから新緑へと里山の彩りの変化が楽しい季節となります。花や木の移ろいが都内と都下では随分違ふと感じるこの頃です。(純)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更等 住所変更、退会等については左記にご連絡願います。

〒285・0922

千葉県印旛郡酒々井町中央台1-17-12 竹澤誠治

万象 五月号

平成三十年五月一日 発行
第十七巻第二号
通巻第一九四号

主宰 内海良太

発行人 小林愛子

編集人 江見悦子

〒241-0816

横浜市旭区笹野台三二六-二

万象発行所

☎〇四五-三六一七五九一

第十六回万象俳句賞作品募集

万象俳句賞は毎年一回、広く作品を募り優秀作を表彰、「万象」俳句の向上、発展に資するもので、多数の応募を期待いたします。第十六回募集の細目は次の通り。

作品 一人二十句、未発表新作に限る

四百字詰原稿用紙の体裁（B4判）とし、冒頭欄外に題名を記入のこと

一通（コピー可）提出、原稿は担当者が活字化し、コピーしたものを選者に送ります。末尾欄外に住所、姓号を明記のこと

他のものを同封しない。封筒に「万象俳句賞応募」と朱書のこと

選者 大坪 景章 内海 良太 小林 愛子 飛高 隆夫 福島せいぎ

原田しずえ 山田 春生 江見 悦子 田村 愛子 中村 千久

応募資格 「万象」同人、会員に限る

締切 平成三十年六月二十日

宛先 〒241-0816 横浜市旭区笹野台三一・二六・二 万象発行所

入賞発表 「万象」十月号。全国俳句大会で、作品一席に万象俳句賞を贈る